

私学経営研修会

【報告書】

■■■■■■■■■■ 研究のねらい ■■■■■■■■■■

制度改革と私学のミッション ～新しい教育を実現する人財と経営を考える～

高大接続・大学入試改革と新テスト導入、高校教育改革、次期学習指導要領改訂など、国は東京オリンピックイヤーに照準を合わせ、急ピッチで制度改革を押し進めている。停滞する経済成長下で子どもの学習費における公立学校との格差は過去最大となり、公立の私学化が進み、フリースクールの法整備・公的支援や国家戦略特区公設民営学校開設に向けた動きも見られ、多種多様な教育の機会が拡がりつつある。さらに、地方創生推進の中で、大阪府では教育庁新設に伴う教育行政一元化の方向性が示されるなど、私学の自主性・独自性を脅かしかねないことが懸念される。

厳しい経営環境の中で、私立学校には時代の動向と要請を的確に見極め、先進的に私学らしい特色ある教育の展開に努め、教育界をリードすることが求められる。その要となるのは、未来の人財を育む重責を担う経営者と教員である。

今回の研修会では、「制度改革と私学のミッション」を研究のねらいに、伝統と革新を両立させる企業の次世代経営者による基調講演、中央と地方の最新情勢についての講演・報告、テーマに関するパネル・ディスカッション、参加者による討議と交流を行い、個性豊かな私立高等学校を視察する。混沌とした未知の時代を生きる子どもたちが、危機を好機に転じて、明日を拓くために必要な新しい教育、教員と経営のあり方を考察し、私学のミッションを探究していく。

- ◆ 会 期 平成28年6月2日（木）～3日（金）の2日間
- ◆ 会 場 滋賀県 大津市 びわ湖大津プリンスホテル
- ◆ 参加者数 123名（募集120名）
- ◆ 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務長またはこれらに準ずる管理職の方
- ◆ 日 程

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	30	30	30	45	30	15	45	15	45	40	30	30
6/2 (木)	受付	開 会 式	講 演	基 調 講 演	昼 食	報 告 中 高 連 滋 賀 県 私 中 高 連 日 私 教 研			パ ネ ル ・ デ ィ ス カ ッ シ ョ ン		教 育 懇 談 会	
6/3 (金)	意 見 交 換 会				昼 食	学 校 視 察 A コ ー ス 綾 羽 高 等 学 校 B コ ー ス 比 叡 山 中 学 高 等 学 校						
	【分科会】 グ ル ー プ 討 議			全 体 会								

- ◆ 講師・パネリスト・コーディネーター・報告者・指導員（順不同）
- 山本 昌 仁（たねやグループCEO・(株)たねや代表取締役社長・(株)クラブハリエ会長）
- 松村 実（学校法人延暦寺学園理事・比叡山中学高等学校校長）
- 藤澤 俊 樹（学校法人ヴォーリス学園副理事長・近江兄弟社中学高等学校校長）
- 馬場 勲（学校法人聖パウロ学園常務理事・学園長）
- 鈴木 康 之（水戸女子高等学校理事長・校長）
- 木内 秀 樹（東京成徳大学中学高等学校理事長・校長）
- 平方 邦 行（工学院大学附属中学高等学校校長）
- 今井 寛 人（國學院大學久我山中学高等学校校長）
- 須藤 勉（一般財団法人東京私立中学高等学校協会東京私学教育研究所所長）

吉 田 晋 (富士見丘中学高等学校理事長・校長)
 實 吉 幹 夫 (東京女子学園中学高等学校理事長・校長)
 山 中 幸 平 (学校法人山中学園理事長)
 中 川 武 夫 (蒲田女子高等学校顧問)

◆ 専門委員・客員研究員・指導員 (順不同)

實 吉 幹 夫 (東京女子学園中学高等学校理事長・校長)
 鈴木 康 之 (水戸女子高等学校理事長・校長)
 長 塚 篤 夫 (順天中学高等学校校長)
 木 内 秀 樹 (東京成徳大学中学高等学校理事長・校長)
 松 村 実 (学校法人延暦寺学園理事・比叡山中学高等学校校長)
 梅 村 光 久 (学校法人梅村学園松阪法人本部分室長)
 新 田 光之助 (筑陽学園中学高等学校理事長・高校長)
 野 原 明 (文化学園大学杉並中学高等学校名誉校長)
 真 城 義 麿 (学校法人真宗大谷学園理事)
 川 本 芳 久 (一般財団法人日本私学教育研究所事務局長代行)

◆ 日程・プログラム

【1日目】6月2日(木)

《研修会会場》びわ湖大津プリンスホテルコンベンションホール淡海2階「淡海9・10」
 【司会・講師紹介等】川 本 芳 久 一般財団法人日本私学教育研究所事務局長代行

08:30-09:00	受 付
09:00-09:30	開 会 式 ◆主催者代表挨拶 吉 田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長 ◆開催県代表挨拶 松 村 実 滋賀県私立中学高等学校連合会会長 ◆来賓祝辞 三日月 大 造 滋賀県知事 ◆来賓祝辞 越 直 美 大津市長 ◆役員・専門委員紹介 正副理事長、私学経営・教育制度専門委員等 ◆研修会運営方針説明 實 吉 幹 夫 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員長
09:30-10:30	講 演 ◆演 題 「教育政策と私立学校」 ◆講 師 吉 田 晋 日本私立中学高等学校連合会会長 一般財団法人日本私学教育研究所理事長
10:45-12:00	基調講演 ◆演 題 「『たねや』らしさを貫く経営と教育」 ◆講 師 山 本 昌 仁 たねやグループCEO・(株)たねや代表取締役社長・(株)クラブハリエ会長
12:00-13:00	《 昼 食 》
13:00-13:45	報 告 Ⅰ ◆テーマ 「新時代に期待される教育と経営」～私学の意義とは～ ◆報告者 實 吉 幹 夫 日本私立中学高等学校連合会常任理事 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員長
13:45-14:15	報 告 Ⅱ ◆テーマ 「滋賀私学の現状と課題」～取り巻く情勢を踏まえて～ ◆報告者 藤 澤 俊 樹 前滋賀県私立中学校等学校連合会会長
14:15-14:45	報 告 Ⅲ ◆テーマ 「改革期の人財と教員の育成」 ◆報告者 中 川 武 夫 一般財団法人日本私学教育研究所所長

【講師プロフィール】

山本 昌仁(やまもと まさひと) 1969年、滋賀県近江八幡市生まれ。1990年、株式会社たねや入社。1994年、第22回全国菓子大博覧会にて最高賞「名誉総裁工芸文化賞」を24歳最年少受賞。2011年、たねや四代目承継、株式会社たねや代表取締役社長、株式会社クラブハリエ会長。2013年、たねやグループCEOに就任。常に進化し続ける現代の近江商人。和・洋菓子を商い、「自然に学ぶ」を大切に事業展開を進める。

【視察校紹介】

Aコース **学校法人綾羽育英会 綾羽高等学校** [理事長 河本 英典 校長 伴野 勇人] 草津市西刈一丁目18-1

『行学一致』- 「知育」「体育」「徳育」「職育」を通して「生きる力」を育む

☆沿革・概要

昭和40年4月、故河本嘉久蔵氏により綾羽紡績株式会社草津工場内に、「行学一致」を建学の精神とし、「知育」「体育」「徳育」「職育」を教育理念とする学校法人綾羽育英会綾羽高等学校(定時制課程・修業年限4年)が設立されました。昭和60年より外部通学生生の募集をはじめ、平成に入り、現在の学科・コースの基礎となる技能コース(調理・美容・自動車整備)や情報コースが設置され、平成2年には修業年限が4年から3年へと変更になる。平成3年3月には高島分校(湖西校舎)を統合し、草津校舎のみでの学校運営とし、平成6年には滋賀県・京都府在住生徒を対象にした狭域通信制課程を開設しました。

平成9年12月、新校舎が完成し、その後、体育館竣工、グラウンド整備と続き、翌年4月には、新校舎の新しい施設を活用し、厚生労働省より調理師養成施設の認可を受けた「食物調理科」を設置しました。平成13年には、新たに介護福祉科を設置し、更に平成19年には校舎を増築するとともに調理・製菓実習室の整備を行いました。翌、平成20年には全日制課程が開設されるとともに、厚生労働省認可の「製菓コース」も定時制普通科に設置。その後、栗東市下戸山に野球場・人工芝のサッカー場が整備されました。

現在、全日制・定時制・通信制の3つの課程の中に、3つの学科・9つのコースを設置し、それぞれの特色を活かし、調理師や美容師、介護福祉士、製菓衛生師などの資格取得はもちろんのこと、創立当初からの「知育」「体育」「徳育」「職育」を通して、「生きる力」を育むことを人間教育の柱として、力を注いでいます。課外活動においては、強化指定クラブ(硬式野球・サッカー・ソフトテニス・女子バレーボール部)を中心に熱心に活躍し、インターハイや選手権大会等、全国大会への出場実績も増えてきています。また、多彩な学科・コースを活かして、料理コンテストや地域ボランティアなど積極的に取り組んでいます。

Bコース **学校法人延暦寺学園 比叡山中学校・高等学校** [理事長 小堀 光實 学園長 佐々木 光澄 校長 松村 実]

大津市坂本4丁目3-1

「一隅を照らす」「能く行い能く言う」「己を忘れて他を利す」

☆建学の精神

本学園は、延暦寺を創建された伝教大師最澄上人のお言葉である「一隅を照らす」「能く行い能く言う」「己を忘れて他を利す」を校訓に、豊かな社会性と謙虚な奉仕の精神にもえる人材の育成に努めています。「一隅を照らす」とは、それぞれが精一杯努力すること、全力で立ち向かうことであり、各人が一隅を照らしていけば、自ずと世の中全体が良くなるというものです。「能く行い能く言う」とは、学んで習得した知識を実行に移し真実(真知)を把握しようということであり、「己を忘れて他を利す」とは、自分のことはさておいても人のために尽くしていこうという意味です。それぞれが全力を發揮し、人のお役に立つことを…、それにはまず行動実践が大切だというわけです。今日の日本の状況を見たとき、ますます校訓が光を放つのです。

☆教育体制

学園として最も大切にしているものの一つに毎日の朝礼があります。声を出しての宗歌・般若心経・校歌、そして心落ち着けて聞く講話は、総合的な学習であると同時に、一日の始まりにふさわしいものになっています。

高等学校は、入学してくる生徒の学力層が幅広いので、私立大学文系学部への進学を目指すI類、3教科に重点を置き難関私立大学への進学(国公立大学受験にも対応)を目指すII類R、5教科に重点を置き国公立大学への進学を目指すII類S、京都大学・大阪大学・国公立医学部など難関国公立大学理系学部への進学を目指すIII類と大きく3つの類・4つのコースに分け、縦のつながりを大切にしながら、先生方がチームを組んで、そのノウハウを共有し、卒業までを見通した指導を展開しています。

☆進路状況と課外(クラブ)活動

丁寧かつきめ細かい教育を心がけ、一人一人の進路保障に努めています。ここ3年間の大学進学者数は、国公立大、四大私大ともに着実に伸びています。

課外(クラブ)活動は、男子バドミントン・柔道・水泳・陸上競技・硬軟式野球・女子ソフトボールの運動部や放送部・華道の文化部が全国レベルにあり、それに続くクラブもあいまって、互いに切磋琢磨し、輝かしい栄光の歴史を作ってくれています。

新校舎建築事業の一環として、昨秋普通校舎棟が完成したところで、中学校と高等学校を同一敷地にする計画を進めるなど、目下教育環境充実のため、第2期・第3期施設整備工事へと続く本校は、活力がみなぎっています。

平成28年(2016)年の私学経営研修会では 明日を築く人財を育む私立学校に求められる最新の教育、 教員と経営のあり方を考察し、その使命について語り合います

今年の私学経営研修会は「水の国」滋賀県が誇る琵琶湖の畔に位置する大津市において開催されます。当研修会の開催にご尽力いただきました滋賀県の私立学校と関係者に対して心よりお礼申し上げます。

各地の私立中学高等学校の代表者たちがここ大津の地に集い
個々の多彩な知識・経験・情報を共有することが、各私立学校の教育活動の一助となれば幸いです。

今回の研修プログラムでは、近江商人の魂を受け継ぐ滋賀県企業の若き経営者による講演、
中央と県私学の取組報告、パネル・ディスカッションや参加者のよるグループ討議のほか、
滋賀県私立中学高等学校連合会の全面的なご協力を得て、綾羽高等学校、比叡山高等学校の学校視察を用意しています。

全国から多くの私立学校の先生方には、ぜひ大津市にお運び下さるよう心よりお願い申し上げます。

一般財団法人日本私学教育研究所 私学経営専門委員長 實吉 幹夫

(研修会参加者募集要項より抜粋)

平成 28 年度私学経営研修会 [滋賀県・大津市] 開催報告

～全国の私立中学高等学校理事長・校長ら 123 名が参集～

平成 28 年 6 月 2 日・3 日、滋賀県大津市・びわ湖大津プリンスホテルで開催した今年度私学経営研修会は、北海道から鹿児島まで 32 都道府県から私立中学高等学校の理事長、校長ら私学のトップリーダー全 123 名が出席した。滋賀県で初の開催となった今次研修会は「制度改革と私学のミッション」を研究のねらいに、新しい時代の教育を実現する人財育成と経営方策を考察すべく研究協議を行った。

地元関係者の協力のもと、激動の改革期に社会と教育の潮流を読み、私学の進路を模索すべく企画実施した当研修会は、講演・報告・討議・学校視察など 2 日間にわたるプログラムを通して、経営者・教学者の意欲を鼓舞し、教育活動の更なる充実につながる好機となり、所期の目的を達成して成功裡に終了した。

【開会式】

主催者を代表して吉田晋・一般財団法人日本私学教育研究所(日私教研)理事長は、「安倍政権が三本の矢の一つに掲げる教育再生においては、教育再生実行会議等の各種提言に基づき改革が進められている。子どもたちの夢や希望を実現するにはどのような教育が必要か。提言の殆どは元々中高一貫教育など私学が先行実施してきたことで、それに比べられるのは私学教育だ。厳しい環境の中で、教員が変わらなければならず、そのためには経営者が変わらなければならない。全国から参集された理事長・校長先生方は、知恵を出し合い独自の教育方針の良い所を共有しながら日本のグローバルリーダーを育てていくことができる。交流と情報交換を通して、日本の教育を良くしていくのは私学だということに改めて感じて実現していく研修会とされたい」と挨拶した。

滋賀県私学を代表して松村実・滋賀県私立中学高等学校連合会会長は、「近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしに いにしへ思ほゆ」と柿本人麻呂が詠んだ歌(万葉集)、司馬遼太郎の著作にも近江の国・琵琶湖の風情が記されている。幾度も歴史の舞台となり高い文化を誇る滋賀県において私学経営研修会が催されることは、滋賀私学の発展のためにも誠に喜ばしく有難く心から歓迎申し上げる。今日社会は激しく変化し子どもたちを取り巻く環境は厳しい。その中を生き抜くためには、子どもたち一人ひとりに確固たる主体性と豊かな社会性を身につけさせることが欠かせない。比叡山延暦寺・伝教大師ら滋賀の先人たちの素晴らしい教えをしっかりと守り社会貢献していく人財の育成が求められる。教育は国家百年の大計であり、私たち教員は子どもたちの将来を見通し見守りながら不断に力を注ぎ未来を切り拓く新しい人づくりを進めていきたい。三日月大造・滋賀県知事は、「新しい豊かさの創造、今だけ、物だけ、自分だけ、お金だけの豊かさではなく、すべての人が将来も持続的に心で実感できる豊かさを、琵琶湖を中心にみんなで作る」と述べておられる。その心を作るのは教育によるものが大きい。次代を担う子供たちを立派に育てるために私たちは日々研鑽を重ねなければならない。その意味でも私学経営研修会が実り多きものとなり、私学教育の発展につながるよう期待申し上げる」と述べた。

滋賀県からは三日月大造県知事が来臨し、「全国各地からこの私学経営研修会にご参集頂き心から歓迎申し上げますとともに、日頃各地で独自の建学の精神を大切に子供たちの教育活動に邁進しておられることに深く敬意を表したい。それぞれの学校経営・教育のみならずスポーツ・文化活動など様々な活動をされている私学の皆さまがこの地で研修される意義を感じている。日本の人口の 10 分の 1 以上の方が本県の 6 分の 1 を占める琵琶湖の水を利用されている。私たちはこの琵琶湖の水を大切にしてきた。山にも川にも草にも石にも木にも命が宿り神や仏が宿するという心を大切にされる方が大勢おられ、それを誇りにしている。私たちはこういう心を大事にしながら新しい豊かさを作ろうということの基本理念に据えて県政運営に努めている。三方よしの精神で商売を営まれそのことを全国や世界に広められる方がおられる。地の利で工業生産も大変多く、県民所得は全国で 4 番目という高い位置にある。農業県として美味しい米を、美味しい水で日本酒地酒を届けている。この二日間の研修で滋賀の歴史・風土・自然を感じていただきながら、これからの私学経営のあり方、何より人の心や教育のあり方を議論して頂き、私どもにもご指導を賜りたい。私立学校の更なるご発展をお祈り申し上げます」と祝辞を披露した。

大津市からは越直美市長に代わり伊藤康行副市長が市長祝辞を代読し、「私学経営研修会がかくも盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げます、大津市に多くの皆様が参集されたことを心から歓迎申し上げます。私学の皆様がそれぞれ建学の精神のもと、個性豊かで多様な教育活動を展開し未来を担う若者の育成と私立学校教育の発展にご尽力されていることに深く敬意を表したい。昨今教員の質の充実や高校改革など学校現場に求められる課題は多く私学経営者の皆様には様々な課題が求められる中、全国から私学経営者の方々一堂に会し「制度改革と私学のミッション」をテーマに当研修会が開催されるのは大変に意義深い。大津市の私立学校の数は多くはないが、伝統と特色ある教育のもと、多方面活躍する人材を輩出し存在感を示している。大津市としてもその教育環境の整備を図り児童生徒の健全な育成に資するよう支援を行っている所である。この研修会を通じて、参加の皆様が相互交流を深められるとともに琵琶湖が育んできた豊かな自然と文化に触れその魅力を感じて頂ければ幸いです」と述べた。

続いて当研修会を企画運営する私学経営・教育制度専門委員らが紹介され、当研修会の企画・運営責任者である實吉幹夫・私学経営専門委員長より、研修会運営方針が説明された。「この研修会は全国の理事長校長先生が集まって年一回胸襟を開いて互いに語り合おうという趣旨で始まり、本年 61 回目を数える。1975 年(昭和 50 年)7 月に議員立法によって私立学校振興助成法が出来上がった。昨年の研修会は山形私立中高協会のご協力で私立学校振興助成法 40 周年を記念して同法を改めて見つめ直す機会となった。本日は研究のねらいのサブタイトルにあるように、世の中には「人ざい」という時に「人」+材料の「材」を使うようだが、私どもは、人は「材料」ではない、「財産」であると考えており、敢えて「人財」という字を使っている。全国に私立学校は幾つあるか。全国の私立学校は一つになって次代を担う子どもたちにより良い環境を用意し、より良い教育の中身を作り、そして次代に生きるために今の時代に留学に来ている子どもたちの糧になる一日一日を送りたいという思いで先生方は活躍されていると信じている。そういう先生方と一緒に、本日・明日は、私どものこれからの使命感を追いながら研修していきたい。現在、国から言われている三つのキーワード「主体性」、「多様性」、そして「協働性」をよく念頭に置きながら研修会で役目を果たしたい。より良い二日間となるよう先生方にはご協力宜しくお願いしたい。」



開会式で挨拶する吉田晋・日私教研理事長



松村実・滋賀県私立中高連会長



三日月大造・滋賀県知事



伊藤康行・大津市副市長

【基調講演】

地元産業界を代表して若きトップリーダーである山本昌仁・たねやグループCEO・(株)たねや代表取締役・(株)クラブハリエ会長が登壇し、「『たねや』らしさを貫く経営と教育」と題して、基調講演を行った。

山本氏は、地元滋賀県を代表する老舗和・洋菓子店を経営され、地元はもとより全国主要都市へ出店されており、常に進化し続ける現代の近江商人と呼ばれ、「自然に学ぶ」を大切に事業展開されている。

今年47歳・就任5年の新米社長であるが、私どもは和菓子のたねや、洋菓子バームクーヘンのクラブハリエを商っており、今年たねやは創業144年、バームクーヘンは65年程になる。昨年、近江八幡北ノ庄の(旧厚生年金施設跡地：甲子園球場3つ分の敷地3万5千坪)を購入、総合施設「ラ コリーナ近江八幡」として内1球場分に昨年たねや・クラブハリエのフラッグシップ店をオープンした。6月初旬に本社を移転、7月中下旬にカステラのコンテナショップをオープンする。ラ コリーナ=イタリア語で丘陵を意味し、緑の芝生を敷き詰めた。たねや農藝では、店舗ディスプレイ用山野草栽培のほか菜園で地場有機野菜栽培計画もあり、土作りから四季を百貨店や店舗にお菓子を買いに来のお客様に季節を感じてもらおう。池は水田が変わっていく。傾斜地は棚田畑、枯れ木は桜並木になる。たねやの創業は1872年で、山本徳治現名誉会長が1984年日本橋三越の出店を皮切りに全国に出店鄙びた近江の四季折々の美しさを和菓子で表現したほか食べる直前に餡と皮を包む最中含义天秤を発売、しっとりとした食感のバームクーヘンでも新たな柱を打ち立てた。現在では滋賀県内11店舗を含む全国42店舗を展開する。その志を引き継いだのがたねや社長の長男昌仁氏とクラブハリエ社長の二男貴男氏の兄弟で、ラコリーナ近江八幡のテーマを「自然に学ぶ」とし、生活習慣ライフスタイルから自然を師匠にして学ぶ事がいっぱいあると思ってやっている。蓬の無農薬栽培 出来立て密封した水羊羹など安全安心にいち早く取り組んできたたねや今後は更に進化させていく。たねや農藝で一生懸命土作りをしている。挑戦の1つがイタリアのEX ヴァージンオリーブオイルで、美味しい商品考えた時に美味しいオリーブオイルに巡り合いそのオーナーから電車コンテナ一台購入した。その時点で商品は何も決まっていなかったが、大福にオリーブオイルをかける「オリーブ大福」を考案した。和菓子の概念は修行時代から学んできたが、余り日本の食材にこだわらず世界の食材を使って和菓子屋として表現できることをどんどん出して行こうと、私の脳が弾けて頭の中がどんどん開かれた感じた。「ふくみ天秤」はよく斬新だと言われるが、最中の皮と餡が合わさった時の美味しさを、菓子屋の職人や息子だけではなく多くの人に食べて貰いたいというのがその発想だった。ペースとしては何も変わらないが、世の中が求めるものを追い求める—それが世界から来て貰える店作りにつながる、そんな思いがある。ラ コリーナは全世界を商圈にしていきたい。世界中のパティシエがクラブハリエに行きたいと思えるようになればいい。グループプロジェクトはまだ始まったばかりだ。元気な時、業績が良い時ほど自分たちの夢の実現に向け進みたい。

わたしどもは商いを滋賀県近江八幡からスタートし、東京・横浜・名古屋・大阪・神戸・福岡と40店舗余りを展開している。たねやグループの従業員は今や1800余名である。私が小さい頃は和菓子の工場の中を歩いて家に入るの、常に父母の背中を見ながら育った。私がたねやを継ぐ時に私は今も憧れの存在である父親の側で商いをしたいと思ったのが中学生の時だった。たねやを世界に通用するにしたい、その為には滋賀県の中で、日本の中でお菓子を食べる空間作りをしていこうというのが父親である会長がここ近年やってきたことだ。私が継いだ時には坪効率全国ナンバーワンの店が30年続いてきた状況下で経営者としては無理だと思ったのだろうが、10年間東京と姫路でお菓子の修行時代を過ごした。先生のカバン持ちからスタートし、お菓子は全く作らなかった先生が明日着る洋服や食事を用意し、先生が次の行動に移られるまでに私が行動していくことを懇々と10年間教えて頂いた。両先生に教えられたことは、お前は何で商売をさせて貰っているのか、朝昼晩と御飯を食べさせて貰えるのはお菓子のお陰だ。そのお菓子を食べた皆が笑顔になることが菓子職人として一番大事だと常々言われた。私はこれを引き継いで米一粒、小豆一粒までロスなく減らしていけるよう工場の職人と日々話し合い減らす努力をしている。菓子屋では安心安全ばかりで少しでも汚なかったり形の悪いものは全部はねている。食品業界でそれをなくすのがプロだ。プロはお客様の前に綺麗なものを出して美味しいと言って貰えるものを作る。とはいえ一万個作って売れる商品が九千個、千個分がロスになるのは神様の罰当たりだ。私たちは百個作ったものを百個お客様に届けるためにどういう仕組みを作っていくかが菓子や食品業界の大きな課題として取り組んでいる。

「自然に学ぶ」今、時代は今変わろうとしている。これからの時代は自然を師匠にして自然から蟻から植物から自然界から学ぶことは沢山ある。メルセデスベンツなど大企業はとっくに取り組んでいる。オリンピックの鮫肌ウェア研究、人間界は掃除に物凄いエネルギーを使っている。洗剤・水道すべてにエネルギーを使っている。カタツムリは雨が降ただけで甲羅の渦は全部綺麗になる。これを真似てカタツムリの甲羅を外壁塗料に使うと雨が降ると綺麗になるものも開発されている。そんなことを私たちは中小企業として1人の個人国民としてこの地域の中でライフスタイルの中でもっともっと染み込ませていこう、近江八幡文化には発酵食品の鮎寿司のように上手く自然から教えて貰ってできた商品がある。人間だけでなくいろんなものが生きている我々の生活空間の中で「自然に学ぶ」という生活スタイルに変えて行ければ、これから地球で共に生きていく。そんな思いでラ コリーナをスタートした。建物内で完結するのではなく風や風土を感じて貰いたい。小さな建物を幾つか建ててその間を歩くように水田や畑を作り、毎日いろんなものが変化していき、終わりなくオープンする。ランドオープンはない。木を植えれば10年で森になる。オープンの時がスタートで百年二百年続く店にしたい。本社も移転したのは、我々のスタッフはやはりお客様の姿を見ていかなければいけない、裏方だから挨拶しなくてもいい、掃除しなくてもいい、言われたことだけやっていけばいい、そんなことをしていたら発展していかない。常にお客様の現場が大事で現場にある小さなことが大きなヒントにつながることもある。シリコンバレーでいろいろなオフィスを見て回ったが、皆楽しそうに働いている。机に座って

ただ時間を費やすのではなく、いろんな議論をしながら、自分の定位置をなくしていろんな席につくという空間を作っていた。これでイマジネーションが凄く湧いてくると感じた。そこで本社を中心の近江八幡に移した。最近私どもは社員だけでなく大学の先生方学生生徒地域の方々にあたねやに来て頂くことが多くなった。私たちが夢に思っていたことが現実になり、会話の中からまた広がる。自分の机で椅子に座っていたら発想は何も生まれてこない。売上が結果であって、売上ばかりを追い求めて下をずっと向いていたら夢がなくなる。常に次、明日どうしよう、明日お菓子を買って貰えなかったらどうしようと、最悪と最高の状況を考えながら商いをしていくことが大事だ。製造・販売・営業だけが創造力を増すのではなく、経理、総務など全ての部署全員が発想を持ってお客様に喜んで頂ける空間作りをしようと今日までやって来た。

私どもの経営理念について。「天祥道」商いの道は人の道、商いの基は儲けることではない。儲けに走れば何処かに歪みが出て何処かに迷惑がかかる。先般、賞味期限偽装の問題が食品業界で発生した。金額ばかりで勝負するからそういうことが起こる。サービス=安くすることばかりではない。何でも安くすることが全てではなく、そこに至る迄にストーリーが描けているかいないか。描けていればお客様に対して説得力がある。栗饅頭は昔60円、今150円とこの地域では倍の価格だが、県内・全国でも当社のものが一番売れている。生産者からお客様に届く迄の一連の流れをしっかり持っているからお客様が評価して下さる。製造でも昔のままではだめで、味はどんどん変化して行っている。スタッフには空気感を読まないでだめだという。お菓子も同じで、どんどん舌が変わって行っている。昔は水も綺麗でペットボトルの水を飲むことはなかったが、今は殆どの方がペットボトルの水を買う。カロリーも甘さも控えてあっさり変わって来ている。それが売れる時代に昔と同様にカロリーが高く砂糖を沢山入れるのが伝統の味だと押し付けていたら我々は存在しない。時代の中で人間の舌はどんどん変わっていくから時代を先取りしてお客様に分らない様に変えていくことがプロフェッショナルとして大事だ。見かけの綺麗さ、プロの技ではなく真のプロフェッショナルは本当の味を今の時代に合ったものにどんどん変えていくことで、伝統は守るのではなく続けることだ。続けるためには今あることをどんどん勉強して、昔は砂糖たっぷりでは栗は殆ど入っていなかったものが売れたが、今は甘いのは駄目で、栗は倍増し砂糖控えめ、餡の量も少なくして皮は厚めにしている。その時大事なのは「店が増えて味が落ちた」と言われたいことだ。無茶苦茶変わっているのに「小さい時から全然変わらない」と言って貰うのがプロだ。今の時代の舌に合わせていっていることが間違っていないという空気感を読んでいくことを商品やいろんな分野でも考えている。お菓子屋の道ではパッケージが綺麗と言われるよりも美味しいと言って頂くのが第一だ。そのためにも材料調達で良い栗を探して1つの商品が出来上がる。商いの道は人の道とは、自分たちが良ければいいのではなく、人様の道から逸れていないかということ振り返ることだ。経営者になると常に売上を気にすると思うが、売上は後からついてくる。スタッフが今日この会社に来てよかった、お客様は今日来てよかったと思って貰っているか、このことを経営者は考えなければいけない。従業員が楽しくなければお客様に楽しいことは伝えられない。そういう会社づくりしていかなければならない。

商いは手塩にかけると言っているが、それは日本古来の精神、文化、思いやりである。相手のことを自分のこととして考えて行動していく。今の時代は自分が全てやってきたと思っている人が多い。私どもは保育園もやっているが子どもたちに「誕生日のお祝いは貴方たちをお祝しているのではなく、この日この歳まで生かして頂いた保護者やいろんな関係の方々へ感謝する日なのだ」と言う。これが日本の素晴らしい文化で、私たちの中にも常に持つべきだ。プロの職人は少し勘違いしてしまうこともあるが、たとえ有名になっても常にどういう場面でお客様がお菓子を食べるか考えて作らないといけない。和菓子業界全体が縮小して洋菓子が元気になっている。海外シェフの洋菓子はどんどん売れ、和菓子職人が作った商品は殆ど売れないのが現状だ。私たちが和菓子を物凄く古臭いものと考えていることが大きな問題で、一日々の家庭の中で畳の間で着物着て抹茶をたてて和菓子を食べる人はごくわずかだ。それが和菓子文化だと言っていた結果、和菓子は衰退した。そういう空気感を早くキャッチして早く次の形へ乗り込んでいく。水戸の日本酒製造販売の方に十数年前会った時、焼酎ブームや外国輸入物が入り日本酒は売れないが最後のチャンスでやってみようとしてニューヨークで日本酒をワイングラスで出された。味は変えずに、お猪口からワイングラスに変えただけで道が開けた。バレンタインにしてもクラブハリエでは一年のご褒美に自分の為に買う女性に飛ぶように売れる。こういった空気感を読まずに文化は文化として残す。歴史のあった経緯は残さねばならないが、今の時代の現実を考えたらこれでもいいのか、早く方向修正しないと大きく逃してしまう。販売の大きなポイントは、お客様が今どんなものを望んでいるのか。夏の暑い時はバウムクーヘンよりかき氷、水羊羹がいい。四季に合わせて今お客様が何を欲しいか考えて展開する。マニュアルは余り作らずに今自分が感じていることをお客様に表現する。教育は通り一遍のことしか教えられないが、お客様に対して心底思っていることをやるとまた買ってくれる。信頼関係構築のために私たちも新入社員教育をマンツーマンに変えた。毎年百人を超すスタッフが入社し、2年目社員がリーダーとなり指導する。女性は7割で、新入社員は必死についてくるが、1年経って一番成長しているのがリーダーである。マンツーマンでつくると常に見られているからうかつにできない。自分がやっていることを次の人に伝えていくのは教育では非常に大事だ。聴く力、話す力も大事だ。

「天祥道」は商いの魂で、今日いかに儲けたかではなく、いかにお客様に喜んで頂けたかの心だ。デパートは全国から集まってくる何十社もお菓子屋との競合になる。今日は一番にならなければと目の色変えるようでは本末転倒になる。売り手のことばかりで買い手のことを全く考えていないようでは、お客様は違う方向に行かれる。今日来て頂くお客様にいらっしやいませと言う前に「ようこそ雨の中お越し頂きました」「寒い中有難うございます」と言うことがお客様との会話につながる。私たちの商いで美味しいお菓子を食べるためには当たり前のことを当たり前に行っていくことが大事だ。

今日はスタッフが来ているたねやの経営理念等をまとめたバイブル「末廣正統苑」を朝夕唱和している。ことがまず朝出勤時、仕事開始前に唱和する。保育園児も朝、唱和する。これが私たちの教育で1つのルール、子どもは、意味はわからなくても、一人でもデパートでもすべての部署でやり続ける。社員数が多くなり場所が離れて行くと社長の考え方がどんどんわからなくなるので理念を始業前に2000人近いスタッフが同じ言葉を各地で唱えることで一つの方向に向かっていき、振り返ることを徹底していく。社長だけが夢や目標を掲げるのではなく、常にスタッフが何か目標を掲げて1日仕事をして頂くことが大事だ。次に全ての仕事が終わった時に唱和する「8つの心」で1日の仕事を振り返り、「有難うございます」の心で1日が終わる。朝と夜に言っていることは言い回しを変えているが同じことだ。朝に反省する言葉を言うと1日が暗くなるので、始める時は絶対成功に導いていくよう目標を掲げる言葉を挙げる。経営者は夢や目標を語って、振り返る時間を忘れておられる方が多い。殆ど振り返らないと自分の重荷になってしまう、常に目標を掲げてきたかできないか、できたら次の目標にステップアップする。次の日に持ち越さないことをやり続ければ人は必ず上へ上へと成長していくと思いつつ「8つの心」を唱和している。いつもいろんな所で講演する時にいろんなスタッフを連れて行き、こういう風に話して貰い、少しは社長が言っていることと合致するかを再確認している。ご縁があれば各地の店にお運び頂き話をして頂ければ幸いである。

【中央と開催県の情勢報告】

政府は2020年東京オリンピックの年をターゲットイヤーとして大学入試改革、高校教育改革を中心に教育改革を進めている。これらの改革が私立学校にどう影響してくるのか、また私立学校はどう対応すべきか。

中央と開催県の情勢報告では、全国団体である中高連の見解と対応を中心にこれらの対応の先頭に立ち強いリーダーシップを発揮して私学全体を牽引する吉田晋中高連会長（中央教育審議会委員）が「教育政策と私立学校」について、實吉幹夫・日私教研私学経営専門委員長が「新時代に期待される教育と経営」と題して、教育再生と銘打ち矢継ぎ早に進む政策の動向と提言、制度改革の流れと最新情報について報告・解説した。開催県私学からは滋賀県私立中学高等学校連合会から地方私学の現状と課題、日私教研からは教育課題と研修取組について報告を行った。

講演

「教育政策と私立学校」 吉田 晋 日本私立中学校等学校連合会会長

4月の熊本地震により熊本県を中心に被災された熊本県等の私立学校及びその生徒等に対して心よりお見舞い申し上げる。家が全壊・半壊した子どもたちに加え、校舎が半壊以上など学校も大きな被害を受けた。中高連としては、私学ボランティア基金義援金を募りこれを基に被災された子どもたちに見舞金を差し上げ、校舎半壊等被害のあった学校には私学ボランティア基金から応援させていきたい。中高連は月1回全国役員会で情報を提供しているが、各学校に情報が届いていかず、使える予算が活用されない例もあり、一人でも多く情報を知って貰いたい。

1. 私学振興を取り巻く状況

① 私学助成の現状と問題点（経常費助成、学校耐震化）

国は都道府県が行う助成事業に対して国庫補助金と地方交付税によって一定の財源措置を行うのが基本的仕組みであるが、都道府県私学助成事業は財源措置の水準までは国による裏打ち保証がなされている。私学助成の環境を実施しやすくするために我々国の私学助成予算と地方交付税予算を何とか増やしていこうと財政厳しき中でも国の補助単価が0.9%増、地方交付税の補助単価が1.2%増と何とかここ数年乗り切ってきているのは他では考えられないことで、大学はどんどん減額されている。これも東京を中心に私学みんなが協力して動いているお陰だ。ただし本来は国が教育の責任を取るべきと考えれば私学助成はもっと厚くすべきで、また多くを依存している地方交付税は一般財源なので財源措置額を割る県もあり、中学校に至っては半分以上が措置額を下回っている現状を考えれば、各都道府県の私学協会の先生方には獲った予算を使ってほしいということをお願いしていかなければならない。

耐震化率の現状と耐震化について。私立学校では高校の耐震化が最も遅れているが、3.11以降漸く80%超えてきた。熊本地震でも耐震化対応が遅れていた学校が大きな被害を受けた。子どもの安全に公私の差はなく、公立の耐震化終了を受けて私学に予算を回すよう求めていきたい。今回の熊本地震は激甚災害指定され、私立学校も2分の1補助となった、実際は熊本市内の公立学校には国庫補助3分の2+地方交付税措置の方向で98%程度は国が補助することになっているので、私学も3分の2補助に上げて貰うようお願いしている。

② 生徒等に対する公的支援の拡大と対応（高校修学支援金、私立中学校生徒支援金）

就学支援金制度について。高校就学支援金制度は平成22年度創設以来6年が経ち、この制度によって保護者の経済的負担は軽減された結果、私立高校の入学者増にもつながっている。しかし依然として年額118,800円は6年前の公立高校授業料ベースのまま見直しがなされておらず、この増額改善の方向に持っていかなければいけないだろう。そして新たに「私立中学校生徒への公的支援制度の創設」を要望した。中高連としては、公立中高一貫教育校のこともあって28年度予算要望で初めて要望書に明記したがまだ理解が浸透されていなかった。その反省を踏まえて28年度予算対策終了と同時に29年度予算編成に向けて、文科省政務三役、与党政策責任者関係議員、自民党教育再生実行本部等にも強い要望活動を展開した結果、4月の自民党教育再生実行本部第6次提言の中にこの要望項目が初めて盛り込まれた。これは画期的だと言えよう。本来であれば小学校も入れていく訳だが、まずは中学校で風穴を開けようということだ。この第6次提言を受けて5月18日には政府「一億総活躍プラン」の中に「家庭の経済状況に左右されることなく、国公立を通じて、子供たちの意欲や能力に応じた学校選択が可能となるよう、義務教育段階の就学支援に取り組む」という文言が入った。さらに今夏の参議院選挙の自民党「Jファイル」（マニフェスト総合版）にこの文言を入れて貰った。更に5月20日の政府の「教育再生実行会議第9次提言」に「私立中学校生徒に対する支援の在り方に関する検討」と明記された。これで予算化への道ができた。なぜ我々がこれを求めるのか。まず、公立中高一貫教育校とはどういう学校か。文科省Q&Aの公立中高一貫教育校の導入理由として、生徒と保護者の学校選択の幅を広げるため、地方公共団体や学校法人等の学校設置者が自らの創意工夫で特色ある教育を展開する観点から、その中等教育における選択肢を提供するということだ。中高一貫教育を受けたい子が私公立問わず受けられるようにしなければならないということだが、私立中高一貫校が良い教育をして成果を修めていることを認めているからこそ公立一貫教育校を作ったのだ。そして子どもたちや保護者の選択の幅を広げ学校制度の複線化構造を進める観点から中学校と高等学校の6年間を接続して継続的な教育課程を展開することにより生徒の個性や創造性を伸ばすことを目的として中高一貫教育制度ができた。そして中高一貫教育制度の選択的導入とは何かという問いには、従来の中学校・高等学校の制度を選択するか、中高一貫教育制度を選択するかは個々の子供や保護者によって異なる。そこですべての学校を画一的に中高一貫教育校にするのではなく、生徒と保護者がいずれも選択できるように設置者がそれぞれの地域の事情を踏まえながらその機会を提供することとしている。地方公共団体だけではなく私立学校も設置者であるにもかかわらず、公立だけは授業料は法律上とれない。無償の学校に行くために私立学校に行くのと同じように塾に通って入学試験を受ける。そのまま放っておいたのではすまされない、おかしいではないかと関係議員に徹底して訴えていった。第9次提言のポイントとして、「家庭の経済状況に左右されない教育機会の保証」という部分はとても有り難い。公立でやること、私立でやることをもう少しはっきり分けて貰いたい。全国平均100万円を超す公立中学校の教育費は全額無償で、これに対して私立中学校経費助成は全国平均で287,000円に過ぎない。私立中学校に通う生徒は自分たちが納める税金分70数万円を損している。更に自分たちの学納金を納めなければならないのはおかしい。全国の私立中学生25万人の内12.5%が所得グループ610万円以下に属する子どもたちに年118,000円・総額30億円程度は国が捻出できよう。

2. 教育制度の改革と教育内容の改革

① 高大接続改革の方向と問題点

高大接続改革の目的は、大学教育改革、大学入試改革、高校教育改革の三つの改革を一体的実施により、学校教育の最大の課題である大学入試改革を子どもたちや社会発展にとってより実効性あるものにする事だった。そもそもは財界企業から「入社する学生の質が悪

い、学力がない、英語が話せない、指示すればやるが自分から仕事を作ろうという努力が全くない。」と言われる。これに対し大学は「高校生の質が悪い、高校生が勉強していない」と言った。今は 98.5%が高校生でほぼ義務教育で、いろんな生徒が入ってくる。私立学校は入学試験があるから下の方の子供たちを面倒見ており、入れた以上はその子たちが卒業できるよう教育し、何とか大学入れるように努力している。大学を作り過ぎたから普通なら大学に進めない子どもたちを殆ど無試験状態で入学させておきながら 4 年間で育てていないのは自分たちの責任だ。質が悪いというなら質を良くすればいい。最終的に「選抜性の高い」「選抜性の低い」大学という言葉が出てきた。選抜性の低い高校と言われたら我々は頭にくるのに、レベルが低いと言われた大学側は反発しなかった。そこで高校教育、大学教育、大学入学者選抜の三つの改革が出てきて、高大の間にある大学入試を変えていけば変わるだろうという話になった。大学入試の実態は、学ぶ側の意欲や教える側の理念など全く無関係で受験生の知識の総量を測るのが主目的になってしまう。高校生の多くは否応なしに知識の暗記と累計問題の反復学習に時間を費やしてきたか、3 年間で無為に過ごして選抜性の低い大学に入る。マークシート方式採用によって暗記型試験がエスカレートしたことが最大の原因だ。大学入試は学校教育の中で重要なターニングポイントであり、入試を受けるに相応しい基礎的資質を測る機会として、改革の方向性・考え方は誰も否定しないだろう。ただそのやり方・方法論が問題になっている。一昨年 12 月中教審答申を受けて設置された高大接続システム改革会議が 3 月末公表した最終報告では、懸案事項の多くが今後の検討に委ねられ、29 年度初頭とされる新テストの実施方針、各大学の個別テストのあり方は別設置の専門家会議で具体策が検討とされるなど有耶無耶が続く。大学入試は自らが解決すべき問題で、国が指示して変えるべきことではない。その意味でも自らの存在意義が問われていることを意識して貰いたいのに、各大学や大学団体の多くは殆ど見解を示さず、ひたすら沈黙して嵐が過ぎ去るのを待っているようであった。入学試験の実質無試験化状態は、一部の大学が高等教育機関としての実体に乏しく学生を獲ることを優先している証だ。これを変えるため大学の 3 つの方針(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)を書かせるに至った。

高大接続改革の全体像について。高大接続改革工程表では 2020 年に向けてどんどん改革が進められるが果たしてできるのか。高大接続改革実行プランは検討の背景として、高等学校教育は授業改善への取組も見られるが、学力の 3 要素(知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度)を踏まえた指導が十分浸透していない。大学入学者選抜については、知識の暗記再生や暗記解決パターンの適用の評価に偏りがちで、一部の AO 入試は学力不問と揶揄される状況だ。大学教育は授業改善の取り組みも見られるが知識の伝達にとどまる授業もありどれだけ学生の力を伸ばし社会に送り出しているのか社会から厳しい評価がある。そこで多様な背景を持つ子どもたちの夢や目標の実現に向けた努力をしっかりと評価し社会で花開かせる三つの改革を総合的なシステムと捉え、一貫した理念のもとに改革に取り組むということだ。具体的方策として、高等学校教育においてはまず「教育課程の見直し」で、すべての生徒が共通に身につけるべき資質能力を明確化して必修科目・教科の改善を図るとともに、各教科・科目間の関係性を可視化する。そしてカリキュラム・マネジメントの中で運営していく。学習指導方法の改善や教員の資質能力の向上を図る。いわゆるアクティブ・ラーニング、多面的な評価の充実、学力の 3 要素をバランス良く育成するために指導のあり方と一体となって評価のあり方を見直すことが必要だ。これも新たな公平性に関連する。高等学校基礎学力テスト(仮称)〔「基礎テスト」〕は、当初高大接続システムの中で選抜性の低い大学が学力の低い子どもを見る目安とすると言う意図だったが、いつの間にか変わってしまった。その結果活用のあり方は、生徒自身による学びの質の向上や、各学校における指導の充実を生かすとともに国や都道府県における教育の施策の改善を生かすこととされ、これでは小中学校の学力テストではないか。31 年～34 年の試行実施期間においては大学入学者選抜や就職等でのモチーフ本来の目的である学習改善に用いながらその定着を図るとしているが、要はその場で得られた実証を踏まえながらやってみて良くなかったら結局大学入試にも何も使わないということと理解に苦しむ。それなら子供たちが今大学受験で受験校を決めていくのに使われる外部の模擬試験、業者テストを基にして学力を見てとれば安価だし開発の必要もない。基礎テストは高等学校段階の基礎学力の定着度合いを把握するためのもので、点数ではなくある程度ブロック化して出す。生徒の基礎学力の定着度合いとは言っても高等学校の基礎学力を何に置くかということは一言も出てこない。高校で学ばなければいけないことは学習指導要領で決まっているかも知れないが、高等学校は基本的にそれぞれの学校は全部学力が異なるではないか。31 年度試行実施の対象科目は国数英で実施し一部科目のみ選択受験も可とする。英語は四技能を測ることができる問題とする。話すこと・書くことの具体的な実施方法は更に検討する。35 年度以降は新学習指導要領も出る。問題内容は学力の 3 要素のうち基礎的な知識の問題を中心としつつ、思考力・表現力・判断力の問題をバランス良く出題し、結果から平均的な学力層に課題があれば基礎学力の定着度合いを速やかに把握できるようにする。教育課程が何も変わっていないのにどうするのか。CBT・IRT の導入は学校内に配備されているコンピュータを活用するインハウス方式と言うが、各学校に全生徒分のコンピュータ整備、費用はどうするのか。IRT の導入は指導充実のために問題等の公表が期待されることも踏まえ更に詳細に検討する。実施回数も学校や設置者として適切に判断できる仕組みとする等々、理想論で全て逃げており、何をしようとしているのか見えてこない。

大学教育改革については 3 つの方針の緊密な関係で大学教育の充実発展にしっかりと取り組む。各大学は今年度中に三つの方針を踏まえたガイドラインを策定しなければならず、29 年 4 月改正省令が施行される。

大学入学者選抜については学力の 3 要素を総合的に評価できるように見直し、実施方針を 29 年度初頭に示し、32 年度から実施される選抜で使用するとしている。高校調査書の改善、個別大学の入学者選抜改革を進めるための支援をしていく。このため「大学入学希望者評価テスト(仮称)〔「新テスト」〕を導入する。この新テストは記述式、CBT 導入、英語 4 技能評価は TOEFL、IELTS など外部試験を利用するか、もしくは試験を作るかもしれない。

高大接続改革の新検討体制として、最終報告を受けて 28 年 4 月から文科省が基礎テストの基本方針、新テストの実施方針、個別大学の入学者選抜の改善にむけた新ルール策定・改善について会議を設置した。メンバーは発表されているが外部の傍聴は許されていない。この検討会議に長塚先生と平方先生が再度参画され対応している。

② 高校教育改革と新教育課程

今回の高大接続改革に絡んで学習指導要領を変えていかなければならない。本来であれば指導要領を先に変えてから試験を変えることを優先すれば新しい試験はわかりやすくなる。先に試験を変えて後から指導要領を変えるから問題が起きるのだ。改訂に伴う学習指導要領の役割としては、いかに自己を見つめて学びを深め、他者と協働してよりよい社会を作っていくか、日本がリードして解決していくことが求められる多様な地球規模の課題にどう対応していくか、そのための処方箋を学校教育の要である教育課程の基準である学習指導要領の理念として社会的にも共有できないかということである。これからの教育課程の理念としては、社会との共有という言葉が多用されている。21 世紀が知識基盤社会であるという認識は共通である。思考力など前回改訂と変わっていない所が殆どで、ただそれができていないだけだ。26 年 11 月教育課程の基準の改善について諮問が出され、アクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメントという言葉が出てきた。そこに 6 月 19 日改正公職選挙法が施行され、選挙権年齢が 18 歳に下げられた。これによって高校の新しい科目「公共」(仮称)なども作るようになったが、シチズンシップ教育なのか、パブリックリレーションなのか意図がよくわからない。学習指導要

領の構造化のイメージでは、学力の3要素の導入、カリキュラム・マネジメントの三つの側面、指導要領の変遷、改訂の視点として、「何ができるようになるか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶか」ということをこれからやっていくとうたっている。

次期学習指導要領改訂に向けた進捗状況について。改訂に向けた検討体制では、教科横断型といいながら各教科の分科会ワーキング・グループが既に十数回ずつ開かれている。改訂の方向として、理数教科の充実、学習基盤となる国・数・外国語に共通必修科目を設定とともに理科の科目履修の柔軟性向上、週当たりの全日制授業時数の標準30単位時間を超えて実施可、高等学校で指導する標準英単語数を1300語から1800語に増加、中高合わせて2200語から3000語に増加。TOEFL、IELTSは最低6000~7000語、多ければ1万語必要だ。私が参画する高等学校部会も毎週行われている。育成すべき能力の共通性の確保、多様化への対応など、このまま進めば子どもたちには負担になる。高等学校卒業単位数は現行通り74単位以上で変えない。基礎テストは必ず実施してそれによって教育を変えていくとしているが、理想ではあっても教育課程がよほどフレキシブルでなければならない。英語は外国語教育改革の中の議論とはかけ離れた形となっている。脱ゆとり教育といわれるが、ゆとりがなければ子どもたちに思考力等を教育できないし、アクティブ・ラーニングもできない。生徒数動向、わが国の少子化の資料もいれてある。今年中学3年生が増えたといっているが、今の日本の人口状況を考えてと本当に心配だ。このまま行くと私立学校、特に私立中学校は厳しい。一校一校のことももちろん大切であるが、私立学校全体のパワーとして、中学校就学支援金制度を実施して、一人でも多くの子どもたちが自分たちの夢や希望を実現するために、自分が良いと思う学校に通える社会づくりを目指して、私立学校振興のためにお力添えをいただくとともに、21世紀の素晴らしいグローバルリーダーを作る、そういう教育をしていけるように協力をお願いしたい。

報告 I

吉田中高連会長の総論を受けて、實吉幹夫私学経営専門委員長は、「新時代に期待される教育と経営」～私学の意義とは～をテーマに、国が進める教育制度改革について私学教育と経営をどう考えていくか、また、子どもたちのための教育のあり方、高等教育のあり方、私学の課題とその存在意義をどうアピールしていくべきかを取りあげた。

1. 教育制度改革の動向と私立学校 ～2020年を視野に入れた教育再生・中央教育審議会等の動き～

(1) 教育再生の動向

- ①政府「教育再生実行会議」第9次提言（多様な個性が生かされる教育の実現）
- ②自民党「教育再生実行本部」第6次提言（私立中学校生徒への公的支援制度創設を本年度中に具体的方策を検討）

私学はそれぞれ歴史と伝統を引き継いできた。学校は国のためにあるのではないという思いがある。

2020年を見据えた教育再生・教育改革の動向について。政府・教育再生実行会議第9次提言、及び自民党・教育再生実行本部第6次提言（4部会提言）の中に、私立中学校生徒への公的支援制度の実現が盛り込まれた。政府・教育再生実行会議第9次提言は「多様な個性が活かせる教育の実現」というタイトルであるが、臨教審では「個性の尊重・重視」が謳われた。自民党教育再生実行本部第6次提言には「私立中学校生徒への公的支援制度の創設について本年度中に具体的方策を検討」と書き込まれた。加えて、6次提言には私立学校施設耐震化推進、国公立におけるICT活用の文言が盛り込まれている。中央団体としては私学への公立の半分になることを懸念している。

(2) 教育課程の改善（次期学習指導要領改訂）に向けた検討状況

- ①中教審教育課程企画特別部会「論点整理」後、各教科別・学校種別部会で審議中（高等学校部会委員 吉田理事長）
- ②新しい教育（アクティブ・ラーニング、ICT活用教育、プログラミング教育等）

昨年8月教育課程部会「論点整理」では新しい教育の内容としてアクティブ・ラーニングが書かれていたが、今回はアクティブ・ラーニングの「視点」という書き方に変わっている。ICT活用教育、小学校のプログラミング教育の話も新しく出てきた。教員が資質能力を向上するよう勉強せよと急かされるわけで、小学校でプログラミング教育を受けた子供たちを我々中高が預かることになる。

(3) 高大接続改革・大学入学者選抜改革

- ①高大接続システム改革会議「最終報告」（3月）

3月の最終報告後、本年度より高大接続改革の新たな検討・推進体制が始動した。文科省改革推進本部・高大接続改革チーム（有識者会議）、二つの新テストの検討・準備グループ委員として私立中高校を代表し高大接続検討会議、基礎テスト検討・準備グループ委員、大学入学者選抜方法の改善に関する協議委員として長塚篤夫先生が、新テスト検討・準備グループ委員として平方邦行先生が参画されている。中教審教育課程部会高等学校部会には吉田先生が委員として出席・発言されている。ここで長塚先生から概要報告をお願いしたい。

長塚篤夫氏：中高連の命を受けて中教審高等学校部会委員として2年半程出席し、初めは戦後の高校教育の総括を行った。当時文科省は高校教育への関心は高くはなかったようで、教育学者によれば中学校教育の専門家はいても高校教育の専門家はいないとのことだ。考えてみれば確かに義務教育の学者はいても高校教育の実態を踏まえた学者は見当たらないということだった。その後、高大接続システム改革会議は後半になって表現が混乱した。教育改革は現場との兼ね合いもあって現在は実務的に改革スケジュールを出したので、スケジュールに沿って実際の対応作業を進めている。総括的に振り返ると、高大接続改革というのは、大学入試が高校教育を曲げているというところがあり、大学入試を変えないといけないということだが、いよいよ少子化が進んだ影響で、競争力、選抜性の低い大学という言葉が出るようになって、高校教育も学力低下につながったのだろう。大学の問題だけでなく高校教育も看過できないだろう。一方で国内の市場を国際的に見ると、産業界は日本の国際競争に関係してくるので学力低下をなんとかしなければならぬと言う。その辺から高大接続改革の議論が始まったということではないか。

(4) 高等教育改革

- ①実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化

これについては、中教審特別部会（長塚篤夫委員）審議経過報告（3月）を経て、5月末答申され、2019年度「職業大学開設」を目指し制度改正が進められる。

かなりの部分でまだ迷走している感はあるが、職業大学校制度化の話が進んでいる。恐ろしいと思うのは株式会社立通信制高校の実態が問題になっているが、ここでも同様のことが出てくるのではないかと。職業大学開設で専門学校との関係性は喜ぶだろうが、この辺は注視していく必要がある。教育の複線化で選択肢が広がるという視点から出てきた話であればいいが、産業界の要請でというだけではなくきちんと理屈付けて議論をして貰いたい

②高等教育改革と「教養教育」

国立大学の独立法人化など大学の株式会社化、昨年6月に文科省が発出した「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」の通知が出され、人文社会科学・教員養成系の廃止や組織転換が進められる中で、本当に幅広い教養と専門知識を備えた人材が育つのだろうか。吉見俊哉・東京大学大学院教授の著作に「文系学部 廃止の衝撃」という新書がある。理系偏重の学部再編を推し進める官僚の暴走により、近代日本の教養の精神は潰れてしまうのか。「文系学部廃止」の報に沸き立つわが国の教育界では、大学教育における「理系」偏重と「文系」軽視の傾向は否定できない。ミッション再定義前のことを勉強していない人にとにかく言われたくない。理系的知は短く役立つことが、文系的知は長く役立つことが多い。「文法学」「論理学」「修辞学」以上三学は文系的、「幾何学」「代数学(算術)」「天文学」は理系的、「芸術学(音楽)」これらガリベラルアーツの7つの科目だ。19世紀は教養という言い方をされてものが発達してきた。それが更に20世紀になって新たな概念として生まれてきたのが「一般教養」だ。歴史をもう一度見れば明らかかなことは多い。高等教育改革では3つの教養教育を捉え直して議論してほしい。

ここまで一度振り返り、教育制度改革の動向と私立学校という題目・視点でまとめてみたい。

国の経済財政再建計画といった所だけ土台にして闇雲に教育改革、制度改革といって子どもたちの未来を保證できるのか。我々私学人としては、子どもたちに真に実効性ある教育の実現に向けて今後も中高連として意見を申し入れていくという視点だけは忘れたくない。

2. 新しい教育と私立学校の課題

アクティブ・ラーニングの視点、グローバル教育、ICT活用教育、プログラミング教育が新しい教育として今後は出てくる。「日本の学校教育を世界に発信 2030年を見据えた学力」ということで、部活動・清掃活動を取りあげている。ここで一教科あたり45~50分授業を5回から10回撮ってそれを45分に編集して見せている。ここでは45分ということに注目したい。今の学習指導要領は、中高校の一単位時間は50分と縛られている。実態としては45分で組まれている学校もあると思う。いわゆる未履修問題もあったが、45分授業という話が出てくるのであれば、一単位50分と決めつけなくてほしい。こんなところも主張していきたい。コンピテンシーの話があった。キーコンピテンシーには三つある。一つは自立して行動する能力、一つは社会的な異質な集団における交流能力=これは他者とうまく関わる協働する紛争を処理解決する能力、もう一つは社会文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する能力、作問もこの三つに向かっている。OECDエデュケーション2030は2018年までに作り変える。これから2、3年のうちに2030年の内容は出てくると思う。このことはかつてニューヨークのデューク大学で教えていたキャシー・デビッドソン氏が「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%が社会に出た時に今は存在しない職業に就くだろう」という衝撃的な論文がニューヨークタイムズに掲載されたというのが慌てて改革という言葉が出てきた背景にあると思う。32・33頁にはOECD2030年に向けた政策対話第2回資料が出ている日本の教育はそう捨てたものではないと思う。例えば大学の制度改革の時にアメリカはで行われている科目のナンバリングというものが日本の大学で取り入れていかないことにはうちの大学がと言っている間は、共通化が進んでいかないで科目のナンバリングは日本の大学でもぜひ制度の中に入れて科目選択できるようにして貰えたらいい。

◇長塚篤夫氏：国際的に言うと新しい教育課程がいろんな教育科目をかけてそれを研究論議しているということで、これを国際的に見るとOECDの話もあったがコンテンツベースからコンピテンシーベースに本来は変わらなければならない。いろんな教科を沢山やるといっても、必要な資質やスキルはこういうものではないかということが国際的にもだいたい共通化してきたので、それに沿って新しい学習指導要領も本来はスキルや資質を育てる方向に向かうべきと言っているが、議論の方は各教科や探求的なことを議論するグループを作ったりと矛盾が生じている状況だと感じている。どうやってこれがまとまっていくのかまだ見えてきていない。創意工夫するような教育をさせて行きたいのだが、実は創意工夫をしなければならないという縛りをかけている。一つ例あげると、国際バカロレアIBには教科書がなく、先生が自らテキストを決める。ところが日本では教科書はしっかり検定する。ここにも矛盾があるわけで、大学入試でIBを日本語でとった生徒の調査書でいいということが決まり発信されたが、まだ少数だがIB課程を学んだ生徒は教科書が本来はないようなところで学んだわけであり、そういった方向を目指すと言いつつ縛りをかけているということだ。

3. 未来を創る私立学校の教育を問う

中教審の新たな動きとして、教育振興基本計画第3期計画の諮問が4月に出た。2030年を見据えた教育政策立案が平成29~34年度にかけて検討される。この中で関心があるのは、大学進学者のための給付型奨学金制度、無利子奨学金創設、幼児教育の無償化がこれからの課題となってくる。同時に学校安全・災害教育の学校安全計画策定、危機管理マニュアル策定などが私立学校に課されてくる。

大阪で4月に実施された教育行政一元化はいわゆる未履修問題時に知事部局で管理するからお行儀が悪い私学は教育委員会に一元化してしまえばいいという話が出て、地教法改正案では教育委員会が私学を指導、助言、援助するという言葉に行きかけたのを一生懸命押し戻して、指導という言葉を取り、私学が求めれば教育委員会は助言援助するとなった経緯があった。そのようなことを全く無視して松井府知事は教育庁に教育局を作って私学を一元化した。2020年オリンピックを控えた東京では都知事が変わる。首長の権限がとてつもなく強い面がある。総理大臣は閣議決定から国会予算委員会、本会議等すべて通って初めて決まるが、地方公共団体の首長は自分で言えばできてしまう。私学助成金獲得運動含めて国がそれなりの地方交付税を各都道府県に確保してくれない限り、各道府県は小さい県は財源がないので国との関係性と重要になる。首長次第で教育行政一元化が全国的に広がっていく動きになると大変なことになる。

4. これからの子どもたちに求められる能力と教育のあり方

主体性、協働性、多様性というキーワードが沢山ある。価値観を互いに認め合いながら他の人たちとコラボレートする、或いは自ら創造性を発揮することが大切である。これらを生かすために必要なのがグローバル教育、ICT活用教育、グローバル教育などで、グローバル化の中で英語教育だけが突出してきた。鳥飼久美子さんが今の英語教育改革について疑念を示し、批判的な論陣をはられている。これだけ人の中で格差が広がっている時に英語教育で格差が出たら、英語が話せない人に長く格差として張り付いていかないか懸念される。日本がここまで反映できたのは日本人が日本語を共通語として世界のことを理解できたからではないか。翻訳英語があったから日本という国はこういう風になったのではないか。その議論を抜きにして英語を喋れない人を認めないようなものの言い方が通るようになったら日本の英語教育は間違っていると言わざるを得ない。グローバル教育、21世紀型教育は何なのかという議論はこれからしていかなければいけないだろう。その時に子どもたちに何を身につけさせなければいけないか議論していく必要がある。あくまでも日本人らしさ、礼節を含めて、それこそグローバル・スタンダードだと日本から発信していきたい。それに混沌とする社会の中で歴史をきちんとおさえていくことが今の自分が何なのかをおさえる上でも必要だ。パソコンを開発したアラン・ケイ氏は「未来を予測する最良の方法はそれを自ら発明することだ」と言った。私どもは子どもたちに付けていくべきものは、未来を切り拓いていく力、創造性、私たちが育てている子どもたちは未来から今の時代に留学に来ている未来からの留学生だ。その子どもたちに私たちが過去の難民として接することのないようにしたいと思う。

報告Ⅱ

開催県からは、藤澤俊樹・藤澤俊樹・滋賀県私立中学高等学校連合会前会長（近江兄弟社中学高等学校副理事長・高校長）を迎え、「滋賀私学の現状と課題～取り巻く情勢を踏まえて～」と題して、県私学の現状と課題について報告を行った。滋賀県私立中高連加盟校は中学校4校、高校11校と全国的にも多くはないが、その成り立ちや教育活動には非常にユニークな学校が多く、厚生労働省人口動態統計によると0～14歳の年少人口では、滋賀県は全国平均を大幅に上回り沖縄県に次いで2番目に高く若者が多いとされる。

ようこそ滋賀県へ。滋賀私学の報告だけでは余り参考にならないので、大都市周辺にある地方都市という状況で困難を抱えている私学という例はあると思ひ、京都・大阪という非常に私学の強い都市の横にある滋賀県の私学について話したい。滋賀県は琵琶湖が真ん中にあるので私学はその縁に這いつくばっているというイメージがある。もう1つ、大阪から京都までが電車で30分、新快速で京都から大津まで10分で行ける。県庁所在地同士が普通電車で10分の距離というのは全国で余りないのではないか。滋賀県全体でも京都からほぼ1時間で行かれるので、滋賀の私学としては苦しい。新入生数は私立中学総数620余名、高校生も2500余名という状況である。滋賀県私中高連加盟校の生徒総数は中高合わせて1万218人。隣の京都では中学校新入生だけで2800名、大阪は中学校新入生7000余名、高校生もそれぞれ1万を超えるなど、私学の大きさは滋賀とは全く違う。流出・流入数では、滋賀から京都私学に通う生徒数は1214名、京都から滋賀私学に通う生徒数は450名ほど。基本的に滋賀県では南へ南へと流れていく。そして大津を通り越して京都・大阪へと流れていくという地域性がある。また私学助成についても当然ながら開きがある。私学主管課は大学私学振興課である。滋賀県では琵琶湖の世話にお金がかかるので財政は非常に苦しい。経常費補助金全国43位、県高校生就学支援制度は年収350万未満が無償で、これは平均36万円の授業料についての無償化だ。京都の場合は年収500万円まで無償で授業料65万円まで無償と決めた。ゆえに無償の意味合いが滋賀とは違う。大阪の無償は授業料55万円まで。滋賀県は私学助成については低い水準で、京都の場合は京都安心・安全修学支援制度についてはもっと全国に発信してほしいと府私学職員が言っている。大阪についてはキャップ制で授業料を上げられない制約を受けるなど、中々難しい。公立の動向を比べると、大阪は進学重点校、いわゆるナンバーズスクール復権を進めている。中高一貫教育校を作り、国立大学付属校でIBクラスを導入するといった取組をしている。公立・私立を同じ土俵にあげて公立を活性化させているように思われる。京都の場合も「堀川の奇跡」と言われるように公立の復権が進んでいる。私立のすぐ前に中高一貫教育校を作るなど挑戦的なメッセージに対して、私学は一定の実力を見せている。滋賀県私学は長いこと公立の補完の役割を果たしており、ナンバーズスクールもそのまま残っている。全県一区入試になる。南へ南へと流れてきて、大津の私学は大津の公立に受験生が集まって、その子たちが京都へ流れていく。公立入試制度も私学の入試と同時期に推薦特色入試を大掛かりに行い、新聞発表でその様子を見て調整できる一般入試があり、一言で言うと公立で完結できる入試制度である。公立中高一貫教育校も3校あり4校目の話が取りざたされている。公立統廃合ではようやく昨年から2校減った。このように圧倒的に公立優位の状況である。その中で滋賀の私学は地域でそれぞれ存在感を持って頑張っている。

地方創生か地方消滅か。滋賀は南へ流れ京都・大阪私学へ流れていく。地方消滅都市896の内3つが点在している滋賀も人口流入で人口が少しばかり増えていたが、昨年位から減少に転じた。地方創生の話をしているとコンパクトシティというのも大都市の周りには多いと言われている。私学が頑張ることで自分たちの私学のあるコンパクトシティに貢献していきたい。それには2つの観点条件がある。1つは、マイナス条件は逆手にとってプラスにしていく。田舎の駅から離れた学校はスクールバス展開で交通の悪い所から同じく悪い所まで生徒を集める。もう1つ地方創生の決め手は人づくりである。私の学校の創始者ヴォーリズは地方農村山村漁村から地方の教育が大事だと元々は公立の英語教諭をクビになってもこの地を離れずに地方での教育に力を注ぐという志を持っていた。近江兄弟社といえばメンソレータムが有名だが、私たちの学校も地方都市にあってそういう伝統を作りたい。その観点から競争と連携と書いたが、競争切磋琢磨する事は大事だと思う。スポーツでは高校野球、ハンドボールなど私学同士が競い合って滋賀県私学を牽引していきたい。合わせて私学の連携も欠かせない。昨年地域連携も重視しようとしてロータリークラブのインターアクトクラブを光泉中高校から教えて貰った。今秋10月に「いのちと平和の集い」という本学園のヴォーリズ生誕を祝う集いの企画で天台宗の比叡山延暦寺執行小堀光實師の講演を行う。地方私学は弱くてもだいたい元気な方に動きつつあるのかなと思う。秋には滋賀県私学振興大会を本格的に開催しよう企画中で吉田中高連会長に講演依頼をしており、滋賀私学は役割分担しながら私学発展の契機にして貰えればいい。

報告Ⅲ

中川武夫・日私教研所長は、「改革期の人財と教員の育成」と題して、多様化・複雑化する社会の中、教員の高い専門性への期待が非常に大きくなっており教員の果たすべき役割も拡大していることを受けて、当研究所では、教員が異文化受容能力やグローバル化対応能力を身に付けることが不可欠との認識に立ち、教員研修を通じ国際社会の喫緊の課題に対応するため、異なる背景を持つ生徒を効果的にグローバルな視点から教育のできる教員の育成を目指して新たな取組対応をしていることを中心に報告を行った。

当研究所としては、国の改革・教育課程などいろいろな課題があるが、今日はイノベーション教育に特化して報告したい。この5月には全国から30名の先生方が参加されイノベーション教育（グローバル・ICT活用）研究部会という研修会をアメリカ・シリコンバレーで開催した。この研修会を開催する背景については、今、世の中の枠組みがどんどん変わって行き、特に人工知能（AI）が発達することによって、2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろうと言われている。そのような時に教育する側としたら何をすればいいのか問われている。今まで、人間でなければできなかった分野にどんどんAIが進出している。一つの例として長崎ハウステンボスのホテルではフロントをロボットが担当してお客様対応をしている。おそらく今後は車の自動運転がどんどん進めばバスや電車の運転士は要らなくなるだろう。今まで人間がやってきた仕事がなくなっていくという傾向がある。そうした時にただ単になくなって失業したというわけにはいかない。AIを使いこなして行く部分と人間でなければできない部分など様々なことが出てくる。今までの教育を旧態依然と繰り返しているだけでは駄目で、そういった時代を想定した上でのキャリア教育それが大事だ。あるいはグローバル市民をどう育てるかという視点からも教育が大きく変わっていくことが求められる。その一つの方法として、アメリカのスタンフォード大学などシリコンバレー地域の学校はかなり先進性をもって実践している。その中で特にSTEM教育は日本では余りまだ知られていないが、アメリカでは幼児期からこういう教育を受けており、それによって新しいものを創造する人材を育てるという考え方が進んでいる。アメリカのオバマ大統領は一般教書演説の中でSTEM教育を官民共同で推進するよう主張している。結果としてSTEM教育はエリート化し、STEM人材は各企業から引っ張りだこである。収入も非常に高いので親も夢中になって教育受けさせたい。今回は二つの学校を視察した。一つは私立で学費は年間480万円程と非常に高い。ものづくりを通してイノベーション教育を行い、トップリーダーとして生きる人材を育てる。高校生たちが作ったものづくりを発表するものづくりフェアをや

っていた。もう一つはパロ・アルト高校という全米でも有名な公立学校で、ここではいま存在しない仕事はシリコンバレー地域でどういうものがあるかを考えそれに対応するキャリア教育を行っている。入学試験はなく、月謝は無償と非常に条件はいいが、シリコンバレー地域は土地価格が高騰しており、結果としてそこに家を持てる家庭の選ばれた生徒が通っている。パロ・アルト高校のアドバンスト・リサーチ・プログラムはメンターにスタンフォード大学生或いはグーグル社員などシリコンバレーの優秀な方々がいて、生徒が自ら考える課題に対してメンターが生徒と一緒に考える。これは高校生の中から本物に非常に贅沢な機会だ。授業は理系にとどまらず、経済学、社会学、司法、芸術などあらゆる分野でメンターがつく。我々を案内したのはマスメディアのクラスの生徒で、地方紙顔負けの本格的新聞や雑誌を作り保護者らに配っていた。取材から製作、編集まで生徒が行う。雑誌はアマゾンで購入できる。これらの制作費を賄うために生徒たちは企業に広告を取りに行く。学校内スタジオではニュースや天気予報を流しており、取材から撮影まで自分達たちが担う。視察で感じた日本との一番大きな違いは、生徒たちが大人として扱われている。親も教師も生徒を指導している。生徒は責任と自覚を持っているということだ。オープンキッチンがある。何に使うのか尋ねると夜遅くまで残っているので食事が作れる。包丁などの管理はどうするのか聞くと生徒はきょとんとしている。自己管理は当たり前で、怪我したら学校の責任と言われ親やマスコミが大騒ぎする日本とは大違いだ。生徒をきちんと大人として扱わないとこれからの教育はうまく進まないと感じた。これは日本の学校が飛び越えていけない。過保護・過関心で何でも学校の先生が生徒のために一から十までしてあげるといやり方はいかになものかと感じた。そのことは進めていくべきだ。失敗は二の次でまずは本人の責任で行動しなさいと日本でやろうとすると、まずは保護者に説明会で何でも面倒見ますではなく生徒を大人として扱うことを明確に説明することだ。教員も共通認識を持ってやらねばできないことだ。学校によっては新しい教育を始めようとする時、リーダーの校長・教頭先生や担当の先生が一生懸命学校を変えようとする時に、教員は反対しないけれど協力せず、結局リーダーがカラ回りするケースがある。こうならないためにも保護者・教員も共通理解は欠かせない。学校は千差万別だが、大雑把にでも共通認識を持っておくべきではないか。日本のガソリンスタンドは車で行けば窓ガラス拭きから給油も店員が全てやってくれる。ガソリンスタンドの店員＝教員であれば、運転手は学校に入学してくる生徒だったら当てはまるのではないか。入学すれば教員が拭いてあげる、燃料は授業で知識を一方的に注入し、生徒は一方的に注入される。これが社会の枠組がガラリと変わってセルフスタンドになれば、生徒は自分でガソリンを入れなければならない。そうすると教員の役割は変わる。安全にガソリン注入できるようにやり方がわからない時は教えて生徒たちをサポートする。このように変化させるためにはそれぞれの役割が変わらなくてはならない。ガソリンスタンドである学校はお金をかけて設備を変えなければならない。精算機やIT機器を買い替えねばならなかったりする。お金はかかるが、生徒がちゃんとそれができるようにシステム構築しなければならない。教員は一方的に教える立場から生徒の学びをサポートする側に回る。これがうまくいけば生徒は在学中から一生ガソリンを給油して走り続けることができる。そのような変化が起こっている。そういう状況だから先生がどうするか。学校は何をすべきか。学校としてはデジタル教科書が普及すればWi-Fi環境整備を進めなければならない。IT機器はどんどん進むので更新に予算がかかる。教員がスムーズに移行できるように学校は責任を持って対応しなければならない。そういう対応時にありがたいのは教科書の代表者を集めて会議を開くと余りうまくいかない。校長先生以下プロジェクトを設けてきちんと権限を与える。そういったことができた学校が発展して行く。教員の役割が変化する。先生方がこれらに対応していくためには情報ネットワークが活用できることが必要だ。中にはできない、不得意な先生には初心者からトレーニングすると50時間かかる。調べればわかることも教えている。教科書に書いてある、参考図書に書いてあるようなこと、調べればわかることを教える、わかることだけを滔々と教えてここは試験出ると手取り足とり教えるのではなく、生徒が創造性を発揮して学習できる場をつくっていく。そのためには一方的に教えるのではなく、生徒たちが実社会の素材を読み解く力、教科を超えた総合力をつけたいといけない。専門教科の学力をつけるのは当然のことで、適応力、対応力など指導に当たる新しい教育の改革＝教員の意識改革である。スタンフォード大学をはじめ日本の学校でも言い始めた言葉としてデザインシンキングの考え方で学ばせなければ、学び合いながら問題プロセスを行うプログラムをやることでそういった考え方のなかから創造性のある子供が育つ。アクティブ・ラーニングと言われているからとアリバイ工作のようなものは駄目だ。教員自身がアクティブ・ラーニングはこういうものだ実感しなければ話が進まない。ポストイットを使ったやり方で、それをもっと発展させる違う意見があつてどんどん変わっていく。毎年同じ行事を惰性で繰り返すだけではいい行事にならない。皆で意見やアイデアを出し合ってもっと良い行事にしていく。そういった作業を通じて先生方が自分たちも楽しめる。

英語教育改革については、英語の教員が優秀な学校は問題ないが、英語の教員が改革のネックの場合もある。文科省の英語教育推進リーダー中央研修は公立中心だったが私学も研修が受けられ、受講後は当研究所特別研修会で指導員として研修実習を行える。各種研修会については研究所ホームページを参照されたい。



山本昌仁
たねやグループ CEO



吉田晋
中高連会長



實吉幹夫
日私教私学経営専門委員長



勝俣俊樹
前滋賀県私立中高連会長



中川武夫
日私教研所長

【パネル・ディスカッション】

パネル・ディスカッションでは、「制度改革と私学のミッション」をテーマに、基調講演に続いての登壇となった山本昌仁・たねやグループ CEO、公立学校経験者の馬場勲・学校法人聖パウロ学園常務理事・学園長、全国を代表して鈴木康之・水戸女子高等学校理事長・校長の3名をパネリストに迎え、国主導で進められる高大接続・大学入試、アクティブ・ラーニング、ICT・グローバル教育など改革の諸施策の方向性や私学にとっての意義、日本の教育、とりわけ中等教育のあり方、人財育成策などについて3名が意見を述べ、コーディネーターの木内秀樹・私学経営専門委員がパネリストから課題と提言を引き出した。（※詳細は全私学新聞記事参照）



木内秀樹コーディネーターとパネリスト(山本昌仁氏、馬場勲氏、鈴木康之氏)



フロアとの質疑

【教育懇談会】

中川武夫・日私教研所長による主催者挨拶に続き、来賓の久保田貢・滋賀県総務部私学・大学振興課長が挨拶を行った。橋本修・滋賀県私立中学高等学校連合会副会長による乾杯の後、参加者は翌日の意見交換会と同じグループ卓に着席し、明日につながるべく名刺交換・自己紹介から交流を深めた。懇談会の締め括りとして、次期研修会開催県を代表して、工藤誠一・(一財)神奈川県私立中学高等学校協会理事長が挨拶し、来年度研修会に向けて抱負を述べた。神奈川県からは5名が参加するなど来年度への意気込みが感じられた。



久保田貢 滋賀県私学・大学振興課長



次期開催県代表
工藤誠一 神奈川県私立中高協会理事長



参加者は翌日意見交換会に向けて交流

【意見交換会(分科会(グループ討議)～全体会)】

翌日意見交換会は、野原明・日私教研教育制度客員研究員が総合進行役を務め、分科会(グループ討議)と全体会の二部構成で進められた。はじめに日私教研役員が世話役がファシリテーターとなり、①新しい教育と経営、②改革と私学のミッション、③人材育成と組織活性化、④私学の課題(生徒募集、特色教育、主権者教育、教育行政、地方創生等)の4テーマのグループに分かれ、各学校が直面する現状と課題等を報告・協議した。学校や地域による違いはあっても抱える悩みや課題には共通する面もあり、参加者は2時間半に亘り本音で話し合い、意見・情報を共有し、新たな視点を学び合った。続く全体会では、テーマ毎に代表グループ世話役が討議の概要について報告した。

野原総合進行役は「代表者の発表を聞き、それぞれが深いところまで議論されたことが伝わってきた」とまとめた。

- ①新しい教育と経営〔平方邦行世話役〕 一世紀前の選抜をやめて思考のプロセスを評価する大学入試制度改革の行方は現時点では何処の学校にも見えてこないで静観せざるを得ない。グローバル化=英語ができるということではないが、英語教育ではグループ内の全ての学校がいろいろ工夫して独自の取り組みを進めているが、4技能全てのレベルを上げるとはなっていない。教職員に英語の試験を受けさせたり、海外研修を行ったりしている。一つ共通するのは、年齢の高い教員と若い教員の英語に対する学びの感覚に差がありその事を埋めるのはなかなか難しいということであった。ICTの環境整備では生徒にタブレット・PCを持たせる場合は家庭負担が学校が用意するか費用負担の問題が上げられた。その辺の問題をクリアして双方向授業を進めている学校もある。アクティブ・ラーニングについては、文部科学省は次期学習指導要領改訂に際しその指導法まで明記していくと言う中で、学校の準備としては、委員会を作り、外部の大学教員に話をして貰うところもある。ここでもやはり年齢的な温度差があり、積極的にそれを進めていきたいと思っている若い教員が沢山いる。アクティブ・ラーニングにもいろいろ手法があるが、どういうレベルのアクティブ・ラーニングを進めるのかきちんと決めないと学校全体としてまとまっていけない。一方通行型授業をそのまま続けていくのは難しいのではないかと。
- ②改革と私学のミッション〔新田光之助世話役〕 教育環境の変化に対応した教育と経営のバランスが問われている。高校法人はもとより、大学法人であっても高校以下の人件費については非常に苦勞されている。1クラスの適正規模の問題も上げられた。新しい教育については、英語教育改革の話から本質論に移り、文部科学省の提案には教員に対する指導の話が見えてこない。指導要領が変わればそれを生徒に伝えていく現場の教員への手厚い指導が欠かせない。フランスでは教員教育、指導が非常に行き届いている。大学での教師教育を文部科学省はきちんと模索していくことが必要だ。大学における新しい教育に対応できる教員養成教育が先決ではないかとの意見があった。もう一つ重要なのは、これからグローバル化が進むほどに大変厳しい世界が待っている子供たちに、逆境に耐えることを教えることではないか。我々はすべての職業が今のままではいかないとされる社会の変化に立ち向かえるよう子どもたちを育てなければならない。この提言には皆が賛同した。そのためには至れり尽くせりではなく、厳しさも教育には必要である。社会が学校に求めることが多過ぎる。フランスでは学校を一步出たら、たとえ学校の近くで万引きをしても学校は知らないという。私学は

しっかりとしたミッションを持って保護者や社会に対応していくべきではないか。私学のミッションについては、私学が良いものを残しつつ、文科省を批判するだけではなく、その提案も実験的に取り入れながらその学校の本質を若い教員に植え付けていく。日本の本質的な教育を守っていくのは私学だからこそできることだ。

③人財育成と組織活性化〔真城義麿世話役〕 このテーマは私学が存続しレベルアップしていくためのポイントになる。制度変更に対応するための課題としては、ICT活用、英語4技能、教員研修を中心に討議を進めた。タブレット使用では資力、セキュリティなど様々な問題がある。英語教育では教員研修、外部試験を受けて貰うにせよ、海外研修引率にしてもスキルアップが求められる。他のグループでは教員採用、組織分掌、研修の問題を取りあげた。組織の中では世代間の断絶をどう埋めていくか、どうやって採用し、現職の教員に影響を与えて行くか。きちんと採用していくことで刺激を与えていくのが大切ではないか。研究所ホームページの採用情報で応募してくる人が多いので研究所のホームページも活用されたい。各学校での初任者研修は二年目の教員が新任教員を担当する学校や、部長レベルによる研修を提起実施する所などいろいろだが、滋賀県では公立が用意する各種研修に私学の教員を派遣する機会も活用できる。学校外で研修して帰ってくると元気になるので、校内研修システム(分掌・学年別など)に加えて校外にも出すのも大事だ。生徒による授業評価アンケートを生徒募集のプレゼンに使うケース、7つの習慣を全面導入して全教員がファシリテーターという事例が紹介された。費用面は大きなネックになるが生徒たちも自己肯定感を持って主体的にいろいろチャレンジしていく雰囲気を学校が持ち続ければ親に対してもかなり有効になる。大都市圏は私学協会主催の研修会に参加できるが、私学の少ない県は苦勞されている。組織として権限、責任、待遇をどうするか。学校特有の難しい面があり、年功序列、抜擢人事の中でどうモチベーションを保って貰えるかという話が出た。学校経営面では、教員だけでなく事務職員のレベルアップも必須になる。事務職員の専門性・汎用性の問題では、この人がいないと学校が回っていかないことがあってはならず、そうは言ってもかなりの専門性は求められることからダブルポジションで回していく、毎年事務室の座席配置を変えて新たな気分の変化を起こす例など工夫や研修をしている。悩ましいのは労働時間の問題で、休日出勤、残業、代休、どう折り合いをつけるか。年間変形労働制や教職員との話し合いなど、契約についてもそれぞれ工夫されている。結論を出すには至らないが、それぞれが情報を出され、人財育成と組織活性化は私学にとって本当に大事な所だと確認できた。

④私学の課題(生徒募集、特色教育、主権者教育、教育行政、地方創生等)〔梅村光久世話役〕 私学の課題は非常に多岐に亘るが、生徒募集では各学校がいろいろな取り組みをしている。全教員が担当校を持って訪問する学校がある。中長期的スパンで男子校・女子校を共学化する、募集の中でどのように学校の体力を維持していくかについては、教員にコスト意識をしっかりと醸成させる、出願の統一で保護者負担を軽減する、家庭訪問するという学校もあった。地域の中でこれまでの方法でいいのか非常に悩みは多い。アクティブ・ラーニングを進めている学校、グループ学習やインターンシップを実践する学校もあるが、答えの出ない教育でどう生徒たちを評価していくか等意見が披露された。主権者教育を教員が主体となって進めて行くには専門性が強すぎるという意見が多くあった。選挙への生徒たちの実際の対応を見るまでは対応に苦慮している。狭域通信制学校は全日制と国の補助金単価が全く違うので多様な学びを保障する通信制の持つ抜本的な教育費の見直しについて中高連も強く動いて頂きたいというお願いもあった。60年間で卒業生数300名という関西の小さな私学の方に、どうやって経営されているか尋ねたところ非常に丁寧な教育を展開され少子化の中で卒業生や地域の支援者からの寄付金で経営されている。こういう発想や素直に寄付を受けられる文化は今後益々必要になってくることが確認された。



意見交換会(分科会) 各グループで熱のこもった討議



全体会 世話役によるグループ討議報告



實吉専門委員長による研修会総括

研修会総括

實吉幹夫・私学経営専門委員長は次のように研修会をまとめた。

この2日に亘り、中央情勢の講演・報告、山本社長の地方での菓子作りのご苦勞、滋賀県私学の取り組みなどを伺い、本日各テーブルでそれぞれの課題を抱えて苦勞されていることを互いに話して、それぞれの取り組み・工夫を聞き合うことで新しい発見があっただろう。灘校の橋本先生が「銀の匙」一冊で授業をされてきたことを考えると、学習指導要領って何なのだと思う。教えすぎという話が議論にあった。子どもたちの学びというのは自分たち自身がやっていくのだということを私たちは一緒に考えていくことが中心になっていく。高大接続改革の話では、一点刻みの選抜が悪いと言われて改革の方向が出されているようだが、努力は非常に大切で、子どもたちが日頃いろいろな努力を積み重ねた結果としての大学入試受験がある。人生には色々なことがあって、大学入試で一発逆転がほしい子どもや高3の夏迄クラブ活動に専念していざという時に力を発揮する子どももいるだろう。いろんな社会をよく見ながら、これからの子供たちのために何をどう進めるのがいいのか、有識者の方々には、自分の意見だけではなく周りの意見も取り入れて貰って施策を立てて頂きたい。各学校にかせられた課題をすべて解決しようとする消化不良を起こすこともあるだろう。来年は新横浜駅近くのホテルでの研修会となるので再びご参加頂ければ幸いである。今回たくさん先生方にお集まり頂き感謝申し上げますとともに、改めて今回ご協力頂いた滋賀県私学の先生方にお礼申し上げたい。各地でご活躍の先生方が元気を出して明日から子どもたちのために活躍されることを祈念して研修会を締め括りたい。

【学校視察】

午後からは、全日制・中間定時制・通信制を併置するユニバーサルスクールの綾羽高等学校（A コース）、天台宗立学校として約 180 年前に創設され、現在は伝統である宗教的雰囲気の中に理想的人材教育を施している比叡山中学高等学校（B コース）の 2 校に分かれて視察を実施した。

綾羽高等学校の伴野勇人校長と高萩康全定時制教頭による挨拶と学校紹介では、企業内学校としてスタートし、生涯学習・キャリア教育の視点等から改革を重ねた結果、生徒数は順調に伸びており、インターンシップ、部活動等でも成果をあげていることが報告され、昨年創立 50 周年を迎え、今後も絶えず変化する社会に対応して新たなものを創り出すことで発展していきたいと語った。定時制製菓コースの授業視察の後、授業作品の試食では多種類の和洋菓子が生徒たちによってサーブされ、その出来映えとおもてなしに参加者からは感謝の声が寄せられた。

比叡山中学高等学校では、松村実校長による挨拶と学校紹介の後、昨秋普通校舎等が完成した高等学校を見学し、別棟にある中学校の授業を視察した。同校は今後中学校と高等学校を同一敷地とする計画を進めており、充実した教育環境の実現によって更なる飛躍が期待されている。

両校共に経営者の理念と教職員の情熱、明るく礼儀正しい生徒たちのパワーが現場から伝わり素晴らしい体験となった。

【綾羽高等学校】



伴野校長、高萩教頭による学校紹介



授業と生徒作品視察

【比叡山中学高等学校】



松村校長による学校紹介



授業・施設を視察

平成 28 年度私学経営研修会参加人数（都道府県別）

北海道	2	東京	25	兵庫	1
岩手	1	富山	2	島根	2
宮城	3	石川	1	岡山	1
山形	1	山梨	1	広島	5
福島	2	岐阜	1	香川	1
新潟	4	静岡	7	福岡	4
茨城	6	愛知	6	長崎	1
栃木	1	三重	1	大分	1
群馬	1	滋賀	16	宮崎	1
千葉	3	京都	6	鹿児島	3
神奈川	5	大阪	8	合計	32 都道府県・123 名

平成28年度私学経営研修会参加者アンケート

☆ 回答数/参加者数 49名/123名(回答率39.9%)

《参加目的》

(複数回答・延べ人数)

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| ① 中央最新情報収集 (20名・40.8%) | ⑤ 自己研鑽、知見拡大 (30名・61.2%) |
| ② 新時代の経営・教育への対応 (24名・50.0%) | ⑥ 参加者との情報交換・交流 (18名・36.7%) |
| ③ 他校の参考事例・課題収集 (13名・26.5%) | ⑦ その他 (1名・2.0%) |
| ④ 所属校の課題解決、改革、発展 (6名・12.2%) | |

～研修プログラムについて参加者から寄せられた声～

伝統の根幹を継承しつつ、枝葉は変化発展させていく若き経営者の心意気とその取組、
厳しく経営に向き合う姿勢、顧客第一主義、社員教育に感服した **【基調講演】**

厳しい時代の経営のヒントと明日につながる成果を得た

他校の取組や本音の討議に勇気づけられた **【意見交換会】**

講演（最新中央情勢）

- 全体の流れが良く解り、かつ報告のみでなく、私学としての対応の基本も伺え、大変参考になった。
- 吉田先生による”解釈”が毎回大変参考になる。もっと長い時間お話を聞きたい。
- 私立中学校生徒への公的支援制度の件、期待している。
- 教育政策がうまく整理されており問題点や方向性が確認でき、参考になった。
- 政府、行政との話など参考になりました。毎回ですが、私学の代表として様々な問題を最前線で戦って頂き感謝している。
- 中央の流れ(文科省)及び、これからの教育界の動きに対する資料が参考になる。
- 高大接続について、文科省が急ぎすぎの感じがしていたが、改めてそのように思った。
- 制度改革の現時点の状況、注意点、今後の見通し等、重要な情報を多く得ることができた。
- 国の教育改革についての中央私学の考え方。審議会等の議論の経緯。○国の動向等を把握できて良かった。教育制度改革の実態とその問題点。
- 高大接続の今後の課題を中心に、制度改革の問題点が勉強できて、本当に来て良かった。○高大接続の現状が良くわかった。
- 私学を取り巻く状況が厳しい中どういった対応をすればよいのかわかった。○私学の視点に立った話を聞いて大変良かった。
- 膨大な資料、大変役に立つ。吉田会長の力強い語りも毎回魅力的だ。○資料が充実しており活用したい。○いろいろな情報を今後の参考にしたい。
- 沢山の資料が有難い。○厚い資料が参考になる。国の審議議会等での活躍を心から期待している
- 多くの資料とともに情報を提示して頂き、まとめて見ることができるととても良かった。○いつも濃度の高い情報に感謝。最近の様子が良くわかった。
- 大きなテーマであった。資料を改めて勉強したい。幅広い話が聞けた。○内容が豊富であったが、資料を多く準備して頂いたので、再読したい。
- 1時間と短い時間だったが、私の知らない情報も沢山あった。一部の先生方が私学のために一生懸命に頑張る姿を見ると、もう少し私学が丸となって声を上げていく必要があるのではないかと感じた。沢山の資料を頂き、ゆっくりじっくりと読ませて頂きたい。
- 大変立派な資料なのでもう少しじっくり聞きたかった。○もう少し時間をかけてじっくり話を聞きたかった。資料は有難い。
- 広範囲に亘る話のためという課題が多すぎて的が絞りにくい内容だった。話はその中の1つか2つに絞って欲しい。
- 主旨は良く分かったが、資料が多すぎて頁を追うのが大変だった。○言いたい事、資料共に、講演時間から考えれば多過ぎる。
- 特に目玉がなかったのが少し残念である。私学助成等資金の面でももう少し教えて欲しかった。

基調講演（企業経営者）

- 伝統を受け継ぎ、その伝統を発展させる方の心意気や考えを十分に聴かせてもらった。
- とても楽しい講演であった。商売と教育の融合を感じ、私学経営について考えさせられる内容でとても参考になった。
- 力強く、聞く側がとても勇気がでてくるお話を頂いた。難題や課題解決に向けて参考になった。
- 経営の根幹がゆるぎなく、ただし、お客を何求めているかの判断、またそれによって枝葉の部分は、日々変えていくことが必要とのことが参考となった。○伝統の根幹は変化すること。○マネジメントに厳しく向かい合っており、とても参考になった。
- 常にチャレンジをしていくと共に、生きる基本、働く基本を大切にされている姿勢に感銘を受けた。
- 経営トップと社員の信頼関係に基づく社員の意識の高さややり甲斐、会社・仕事に対するプライドの高さに敬服。顧客の目線の重要性、学校にも共通点。○地方の企業が全国規模に発展する過程が分かって興味深いものがあった。
- 歴史を持ちつつ、新しい事に挑戦することで業界の先頭にいる方の話は、学校とは異なるが故に、新鮮な考え方、共通する理念等、大変興味を持った。
- 山本氏の企業経営者としての基本姿勢は私学にも共通する部分が多く有り面白く拝聴した。異業種の方の話は良い。
- 例年、クリエイティブでリアルな話で楽しみ、今年も満足。将に近江商人の国に来た実感。歴史は生きている。不易流行なり。
- 実業界の人の言葉には説得力がある。今後も期待している。○企業の信念をお聞きでき、大変有意義な講演であった。
- 経営者としての心構えと、古いもの、現在のもの、これからのもの、とらえ方、考え方を再認識できた。
- 経営者の理念と、それを浸透させる従業員教育に多くのことを学んだ。私学＝企業という側面で具体化していく。
- 経営者の視点での考え方、非常に参考になった。生徒は学校にとってはお客様。一人ひとりを大切にしていくことは共通であるし、最高の教育を生徒に

感じさせることが日々の指導に生かしたい。

- 職種は違っても、仕事に対する心構えは同じなのだと言うことを感じました。目先のお金に先走るのではなく目の前にあることを丁寧に1つずつ少しずつしっかりやっていきたいと思った。仕事は頭でするものではなく心でするものだ…人の心は人の心でしか動かないのだと言うことを感じ、とても良い機会であった。○業種は違えども、心は同じ。○学校現場とは違う視点で大変面白い話を聞いた。
- 山本氏はバイタリティがあって大いに刺激された。「たねや」という企業の理念・経営が、学校という組織運営に大いに参考になる講演であった。特に企業のトップとしてのリーダーシップが単に企業人というより、社会(人々)と自然の調和を持って運営されていること、大変ためになり教育にも関係していると思った。
- 商人の意気、経営者としての考え方や思いなど直接伺うことができ、大いに参考になった。
- 売り上げを目標とするのではなく、お客様に喜んで頂ける事を目標とすべきという近江商人らしい社長のお言葉は私学経営にもつながるもの。成功者はみな同じ事を言う。○示唆に富んだ会社経営の理念には感服した。○近江商人の伝統的な思想に心動かされた。
- 意欲的な会社経営に参考になる面が多くあった。社員を登場させて実情をオープンにする手法も見事であった。
- 人材教育、職場の雰囲気、各自にふさわしい目標を持たせること。また、業種をいろいろ体験させ、リーダーを育成する。
- 理念・方針の共有の大切さを学んだ。○何事にも理念を持ってチャレンジする姿勢が素晴らしい。○山本氏の熱い思いに感動した。
- 「たねや」の事業展開や理念が理解できた。○常に将来を見て変化に対応していく。○心の教育を進めている中で参考になった。
- 「自然に学ぶ」を軸に不易流行の姿勢で時代の流れに乗った成功例は多くの点が参考になった。○自然と共に歩む姿勢に共感。
- 新人研修の丁寧さ、理念などを唱える等大変参考になった。○新入社員教育(指導)担当、木の幹・枝葉の話
- 朝は目標、夜は振り返り、ラコリーナに行きたくなった。○期待していたせいか、余り面白くなかった。

報告Ⅰ (中高連)

- 学校経営に参考になることが沢山あった。とても良いお話に感謝したい。
- 資料が有効に学校で活かせる。関係の先生方にもコピーして配布できるので有り難い。
- 最新情報が参考になった。資料を再度読み、考え、活用したい。様々な資料はとても助かる。
- 新たな傾向、課題を鵜呑みにせず、批判的にも見ることの重要性を再認識した。
- 毎回テーマ絡みの本の紹介があってとても良い。
- 實吉先生のユニークなお人柄が印象的で、話の内容も講演の中身を具現化するもので大変勉強になった。
- 近況、情報収集に有効だった。大いに参考になった。○膨大な資料、大変役立つ。感謝している。
- 私学情勢講演と同様の思いの他、政治家の考え方も交えて、その考え方の一端を知ることができた。
- 高大接続などもっと詳しくお聞きしたい部分もあったが、感謝している。○もう少しじっくり聞きたかった。
- 高大接続は大切な事ではあるが、なんとなく疑問を感じていたが、やはり皆思うことは同じなのだと思った。
互いにとってより良くなるような、責任のなすりつけにならないよう、気をつけていきたい。
- 英語教育推進については日本国としてじっくりやる必要もあると思う。愚民化政策にならないように注意したい。
- いつもながら勉強になる。しかし、時間不足で1つのテーマが深まりにくい。
- 吉田氏と重複した所はあったが、人を育てるのはすぐに答えが出ることではないので、難しいところだと思った。
- 私学情報を講演された吉田先生と重なる内容の部分もあったが、参考になった。○講演と重なる点が多い。○大阪は大変だ。
- 資料が多いのは有り難いが、聞きながら探るのは難しい。話の焦点を絞った方が良かったのではないかな。
- 言いたい事、資料共に多過ぎ、テーマを絞るべき。○資料の何処の話をしているか分からず、出来ればPPTを用意されたい。

報告Ⅱ (滋賀県私学)

- 京都、大阪との比較は滋賀県の実状を理解するのに役立った。簡潔でわかりやすい。○厳しい状況の中で様々な工夫をしている。
- 地方で有りながら地の利を活かした教育は素晴らしい。○マイナスを逆手にとってプラスにのこのことが印象に残った。
- 単なる報告でなく、どのように出席者の参考に出来るかをよく考えられ、また、話しの運び方、語り方も大変参考になった。
- わかりやすく端的にまとめられていて、聞きやすかった。私学として共通した課題も多く感じた。
- 滋賀の私学を近江の歴史と文化、近辺の大都市との関係を引用し、うまく紹介されていた。
- 大都市周辺の私学を考える事ができた。○京都、大阪との比較を交えておられたので、聞きやすかった。
- 地域の様子が良くわかった。県の規模も同程度なので参考になった。○各都道府県で独自の課題があり参考になった。
- 私学11校、大都市に交通時間で移動できることでのリスクもあるか。教育の内容や新しいとりくみに苦勞されている。
- 本校も滋賀県と同じ環境に身を置き、自分達のこのように感じ拝聴した。立地に関してはどうすることもできないので、それ以上に魅力ある学校づくりをしていかなければならないと感じた。
- 滋賀県の抱える私学経営の課題、地域性がわかった。○滋賀県私学はよい個性がある。○滋賀県の状況がわかりやすく語られていた。
- 京都・大阪と競争の関係の中で、明るい傾向にあるポイントが聞きたかった。
- 巧みな話術で滋賀県の私学が厳しい状況であることが理解できた。○時折、笑いもまじえて滋賀の私学の勉強ができた。
- 滋賀県の現状についてユーモアを交えて表現して頂き有り難かった。○とても楽しい講演で、滋賀の私学経営の厳しさを知った。
- 少し表面的であった。問題点(課題)と、それに対する対応策を掘り下げて話して欲しかった。

報告Ⅲ (日私教研)

- 教師育成の観点と今後の課題解決に向けた1つの切り口を暗示して頂いたように感じた。
- 新しい教育のめざすべき方向がわかりやすく解説されていた。
- これからの教育の在り方、先生の在り方を多方面から分析され、これからの取り組みの参考にしていきたい。
- 生徒の質の問題ばかりに視点が向きがちであるが、生徒を教える場の職員の意識の向上や勉強が必要だと感じた。教員向けの○人材と教員の育成では、職員自らが自己研修を重ね、常に新しい教育に目を向けて行くことの必要性を感じた。
- いろいろ企画、実行されているのに当方が利用していないことを反省した。この研修(外)も積極的に利用を考えたい。

- 今、本校が取り組んでいる事と一番近い内容で、気になっている部分があった。わかりやすい説明で良かった。
- とてもわかりやすく参考になった。話の内容を利用させて頂く。○コンパクトにまとめられていた。
- 大変参考になり、わかりやすい説明であった。○研修等に参加してみたいと思える内容だった。
- よい資料をみせてもらった。情報が参考になった。○テーマを絞って深まった。○テーマがはっきりしていて、良くわかった。
- 当校が変わるためには社会・保護者・教員が変わる必要がある。まず教育課程のシステム構築が先決で、そのためのトレーニングをして準備することが必要である。これらの紹介はヒントになった。
- 旧態依然を変えていくにはまず教員が変わらなくては、同時に保護者の意識も変えなくてはという所だか時間のゆかりそう。
- 「シリコンバレー流教育デザイン」は大変興味深く拝聴した。また「ガソリンスタンド」の例えは大変良かった。
- イノベーション人材育成の方向性。○世界的な流れも感じることができた。研修会にも関心が高まった。
- アメリカでの最新の教育の報告を伺い、それに匹敵する人材を育てるにはどうすべきか考えさせられる話だった。米国の先進的教育を参考にしたい。
- STEM教育等アメリカのキャリア教育のレベル意識の高さを感じた。○STEM教育について理数重視の教育とどの様に異なるのか知りたい。
- グローバル・ICTへの対応は、若い世代に期待する。○一般的な話だった。

パネル・ディスカッション

- とても良い内容であった。話題が多岐に亘っていて三人のパネリストの見識の高さを強く感じた。
- たねや・山本社長の強い意志及び細かな配慮について近江商人の心の中が感じ取ることができた。鈴木校長の若い頃からの経験に基づくご意見はとても参考になった。
- 講演以外の話を聞いて良かった。パネリストに学校関係者以外のかたもおり、また違う視点で捉えられることが良かった。
- パネリストの構成が良く参考になった。コーディネーターの進行も良かった。
- 仮想の議題でのディスカッションでパネリストのご苦労があったと思う。その中でたねやの山本氏の存在感があった。
- 山本社長が関わったことで議論が深まった。○たねや社長の意見が光った。経営者として常に前向きでありたいと感じた。
- たねや社長の話か教育者（学校経営者）と異なる視点でのコメントで非常に参考になることが多かった。
- 山本氏のお話が一番興味深かったです。○山本社長の話か特に参考になった。○山本氏の思いが伝わってきた。
- 山本氏の発言が為になった。山本氏の考えに賛同できた。○実業界の方を今後も是非！！
- たねやの山本社長や先代の社長もユニークな人物である。
- 各方面にわたる話題を三者三様の思いや考えが表明された。これをどう理解し進めていくか大切な事と考える。
- 経営の理念においては、企業と私学の共通点を感じられた。○他の私学の直面している課題と取り組みは参考になった。
- 私学の保護者の方のお話は、私学に求められていることがわかり良かったです。
- 3名のそれぞれの立場の違う方々から、それぞれの仕事・職務においてそれぞれの大切な事を教えて頂いた。失敗をマイナスと受けとめず反省しつつもプラスに考えていける様にしていきたい。
- 3名のパネリストのそれぞれの講話がなるほどと感動することで、とても勉強になった。
- 私学のミッション、人を育てるということについて、それぞれの立場からのご意見を伺い、自身の考えも明確に整理するのに役立った。
- 3人の先生方の前向きでエネルギー溢れる話は、さまざまな場面で参考になった。
- たねやの具体的な中身をさらに深めた形。学校分野の深まりがもう少しほしかったと思う。
- 異業種の方かどういふ信念で人材育成に関わっているか知り得て大変面白く拝聴できた。テーマが次過ぎて細部迄の話に至らず残念。
- それぞれ有意義なお話を伺ったが、会場の様々な分野で造詣の深い先生にトピックによって話を振っても良かったのではないか。
- 山本氏の話か特に具体的でよかった。パネリストのテーマへの切り込みが冷一つだった。パネリストへの質問を2つに絞れよかったと思った。
- ①新しい教育を実現する、②それを実現するためには何か必要か？
- 特に山本社長から多くの為になる話を聞いて勉強になった。テーマが冷一つ絞り切れなかったような気がする。
- パネル・ディスカッションは内容を深めることが難しい。○少し物足りなさがあったが、興味深い発言もあった。
- たねやの山本氏の話か聞く会のような会だった。主題の制度改革と私学のミッションかどこかへ行ってしまった感あり。

教育懇談会

- 2日に向けてグループ毎になるのはとてもよい方法と思った。○意見交換会と同じメンバーにする方式は成功している。
- 翌日の意見交換会につながる素敵な時間だった。○意見交換会と同じメンバーでお話が出来たのは良かった。
- 明日の意見交換会の前に良い顔合わせになる。○同じグループで顔を覚え、翌日に役立った。○自己紹介等を行ったのが良い。
- 親しく皆さんと会話ができ、アイスブレイキング的効果は十分果たしている。様々な先生方と情報交換ができて大変良かった。
- 日頃思っている事、悩んでいる事、他校かどんな取り組みをしているのかざっくばらんに聞くことができる貴重な機会だった。
- 他の私学の直面している課題と取り組みは参考になった。管理職の根本を知った。
- とても打ち解けた形で各県の代表の方と情報交換ができ、有意義な時間だった。○オープンな意見・情報交換が有益だった。
- なごやかな雰囲気、他校の話か聞くことができた。○和気あいあいとした楽しい雰囲気の中で教育談義ができた。
- このような機会がないと他校の方々と知り合う機会がなくなってしまうので今後も続けて欲しい。○着席形式になり話しやすくなった。

意見交換会

- 各先生方の経営方針、教育方針を聞くことができ、大変参考になった。○顔を合わせて話す楽しさがあった。
- 大変有意義な議論ができた。初め思っていたよりもとても活発な意見交換ができ、大変楽しかった。
- 各都道府県各私学の先生方と有意義な意見交換をすることができた。興味ある内容については早速学校に持ち帰り検討したい。
- 各校の特色や取り組み、課題を知り、大変勉強になった。各学校の先生方のご苦労に本校でもまだまだやれることがあると感じた。
- 大変な学校の現状が良く分かった。○各学校色々なこと、今後の取り組みや対応のことなど参考となる話か聞いて良かった。
- 具体的に実行できる多くのアドバイスを頂き、特に世話役の先生からは有益なお話を頂いた。
- 各学校の取り組みも知り、本音も聞いて参考になった。○異なる地区の学校について、知ることが出来て有意義だった。

- 他の学校の様子が分かり良い情報交換が出来た。東京のリーダースHIPの重要さを再認識した。
- 懇親会と同テーブルだったので話しやすかった。○前日に顔合わせをしていたので話しやすかった。
- 懇談会の流れでそれぞれ意見が出て参考になった。○情報とともに考え方が参考になり、とても有意義であった。
- 様々な状況の中で各校が努力していることがわかった。私学の多様性を改めて感じる事が出来た。
- 各校の実情、苦労話を知ることが出来て良かった。○他私学の直面している課題と取組みは参考になった。○沢山の先生方と意見交換できた。○各校の現状、問題点を聞くことが出来た。今後取り組んでいきたい。○各府県の現状がよくわかり大変参考になった。課題も共有し有意義な意見交換ができた。○現場の声を聞き、ほっとしたり、参考になったり。
- さまざまな意見や各校の取組みが直接聞いて大きな学びがあった。人数もちょうど良かった。○2日間じっくり話し合えるのが良い。
- 経営の問題解決に役立った。○様々な学校の経営事情がとも参考になった。○各学校の先生方の貴重な体験、取組みは有意義。
- 制度改革と新しい教育への取組み、教育の本質を忘れた制度改革(高大連携、入試改革など)はナンセンスである。日本の社会を変えていくような教育で、人財を育てる工夫を考えなくてはならない。○情報共有できても中身の濃い意見交換会となった。
- 各校の先生方と細かいところまで話を聞くことが出来て得るところ大であった。また元気と勇気を頂いた。
- 非常に活発な議論になり参考になる事も多かったが、先生は皆話好きで中々発言機会が得られず、もう少し討議時間を延ばして欲しい。
- 自校の生徒募集の様子がよくわかった。たっぷり他県の状況を知ることができて良かった。○時間が足りなくらい様々なお話が他校の先生とできて有意義だった。○他校も同じ悩みがあることが理解できた。採用について、研修について、人事について等。
- 異なる地域で学校を運営されている先生方から様々な経験や状況に基づく話を聞くことができ、非常に有意義であった。
- 互いの学校の抱えている問題点、悩み、解決策も異なるが、沢山の先生方の話の色々な面で活用できると感じた。
- 各県の事情を知ることが出来、良い情報交換ができた。帰ってからの検討課題も見つけられた。
- 募集・特色教育・主権者教育について主に協議した。各校の取組みが大変興味深く参考になった。感じたのは、都会の高校と田舎の高校が抱えている主たる命題が違っており、ある部分で視点のズレを感じた。全体としてとても有意義だった。

学校視察

A 綾羽高校

- 全日制、定時制、通信制それぞれの強みが活かされた学校であった。学習への主体的な取組みが感じられて良い学校だった。
- 多種多様な課程、コース制の学校の苦労。○普通科普通コース等ではわからない多くの面で勉強になった。
- 生徒達が生き生きとしていたのが印象的です。○元気の良い生徒さん達でとても気持ち良かった。あいさつもしっかりと、日々の先生方の指導がしっかりなされているのだと感じました。○特に生徒のみなさんに感謝したい。
- 学校を見せて頂くとうまくわかる。心遣いも行き届いていて良い研修会の仕上げとなった。○見学時間ももう少し長い方が良い。

B 比叡山中学高等学校

- 歴史と伝統を感じる学校だった。その中で校舎等のハード面の改革をこれからどの様に生徒数を減らさずに進めるのが興味を持った。
- 古い校舎でも居心地が良ければ良い。そう思わせるものがあった。○見学校の状況が理解できた。落ち着いた学校と思う。
- 琵琶湖が見える学校環境がすばらしく、生徒達の伸び伸びした雰囲気にもうなずける気がした。○授業が現られて良かった。
- 時代とともに課題はあるものだと改めて思った。○興味深い内容だった。○良い視察になった。関係の学校に感謝したい。
- 学校の説明の時間がもっとあってもよかった。(どのような取組みにどのような成果が出ているかなど)
- 授業見学の時間が短かった。○自由見学では学校の様子が良くわからない。

その他(全体)

《来年度以降の研修会への要望等》 《今後研修会で取り上げてほしい研究テーマ等》

- 例年よく考えられた運営で改良点は思いつかない。このまま続けて頂きたい。本県参加者が少なく残念、来年は増やす努力をしたい。
- 会社のトップのお話は興味深いものが多い。来年の人選も期待している。○企業等で活躍されている人など、有名人の話を知りたい。○異業種の方による経営手法を伺いたい。○吉田会長の話に十分時間をとっていただきたい
- 講演(私学情勢)と報告Iが内容的に重なるので一本化してはどうか。空いた時間で「私学経営の現状と解決の方向性」のテーマ等を。
- 教育法についての研修ができる時間があっても良い。教員の校内研修を活発にやっておられる学校の事例等を紹介して貰いたい。
- 私学経営の観点から地元あるい地域と私学がどう結びつけて存在感を作り出すか。そんなテーマももっと扱って欲しい。
- 大学入試改革と私学の対応(但し、入試は共通テストだけでなく、大学の2次試験まで視野に入れて欲しい)
- 評価について(授業評価との関連性など) ○主権者教育の事例や授業研究等 ○労働時間について ○来年度も参加したい。
- 滋賀県私立中学高等学校連合会の皆様に変にお世話になりお礼申し上げます。ここまでの準備等、大変だった事と思う。『たねや』の話が聞けるから研修会に行くように!と理事長にすすめられて参加したがそれ以上の大きなものを沢山頂いた。
- 役員の皆様、準備から進行までお疲れ様。感謝している。

【次回研修会のお知らせ】

平成29年度私学経営研修会は 神奈川県・横浜市 新横浜プリンスホテルで
平成29年6月8日(木)・9日(金)に開催します

日私教研 私立学経営研修会を滋賀県で開催

新しい教育 実現する人財と経営探求

パネル討議や講演等通じ

一般財団法人日本私学教育研究所（吉田晋理事長）は、6月2、3の両日、滋賀県大津市内のホテルを主会場に「平成28年度私立学経営研修会」を開催した。全国から私立

中学校の理事長や校長ら約120人が参加、今年の研究のねらい「制度改革と私立学のミッション等を通じ研究協議した。」

（近く詳報）

新しい教育を実現する人財と経営を考える」に沿って、文部科学省等による制度改革が急ピッチで推し進められる中で、未知の時代を生きる子供たちが明日を拓くために必要な新しい教育、教員と経営の在り方等を講演やパネル討議、学校視察等を通じ研究協議した。

研修会冒頭の開会式では滋賀県の三日月大造知事らが出席する中で吉田理事長が主催者を代表してあいさつし、「教員、経営者が変わりグローバルリーダーを育てようというのがわれわれの思い。日本の教育を良くしているのは私学だ」という

ことを感じ、実践していく大会にしたい」と語った。その後、松村実・滋賀県私立中学高等学校連合会長が開催県を代表してあいさつした。

開会式に続いては吉田理事長が日本私立中学高等学校連合会の会長として「教育政策と私立学校」の演題で講演、公私立学校間で公的支援に大きな開きがある中で私立中学生に対する公的支援措置の創設を求め、政府・国会関係者に要請、予算化

の道ができてきつつあることや、高大接続改革では大々自身、特に私大トップ校の対応が重要なことなどを指摘、子供たちが自ら良いと思う学校に進学できる体制づくりの重要性を力説した。

私学経営研修会で主催者を代表してあいさつする吉田理事長

次に地元・近江八幡市に本店を置き、和・洋菓子を全国展開するたねやグループの山本昌仁CEOが「『たねや』らしさを貫く経営と教育」と題して基調講演を行い、人の道から逸れない商いの、現場重視の商いなど自身の商哲学と実践を語った。その後、實吉幹夫・日本私立中学高等学校連合会教育制度委員長が教育改革の動向を説明、英語教育に関してはフィリッピンのように英語が話せないと社会の最下層となる危険性を感じていることや日本人らしさ、

礼節を大切にする姿勢がグローバル・スタンダードだと発信していきたいと語った。続けて藤澤俊樹・前滋賀県私立中学高等学校連合会長が滋賀私学の現状と課題について、中川武夫・同研究所長が改革期の人財と教員の育成について報告。初日最後にはパネル・ディスカッションが行われた。2日目は午前、人財育成と組織活性化等をテーマにグループ討議が、同日午後には2班に分かれて滋賀県の綾羽高校と比叡山中学高校を視察して研修日程を終えた。



日私大津市で私立経営研修会開催

制度改革と私学のミッション・パネル討議

一般財団法人日本私学教育研究所は、6月2、3の両日、滋賀県大津市内のホテルを主会場に平成28年度私立経営研修会を開催した。ここでは、初日のパネル・ディスカッション「制度改革と私学のミッション」新しい教育を実現する人材と経営を考える」の概要を報告する。

創設者 今も教育に生きる私学

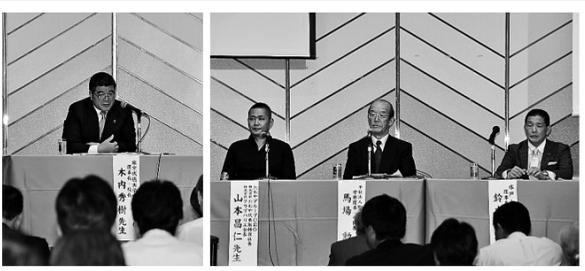
海外への挑戦には英語は必須

木内 今、いろいろな教育制度改革が予定されています。どう対応しているかという点について、どう考えていけたらと思います。最初に鈴木先生からお願いします。

- | | |
|----------|----------------------------------|
| パネリスト | たねやグループCEO |
| 山本 昌仁 | 株式会社たねや代表取締役社長
株式会社クラブハリエンゴ会長 |
| 馬場 勲 | 学校法人聖パウロ学園
常務理事・学園長 |
| 鈴木 康之 | 水戸女子高等学校
理事長・校長 |
| コーディネーター | 東京成徳大学中学高等学校
理事長・校長 |
| 木内 秀樹 | 敬称略・順不同 |

その中心は鈴木先生がおっしゃいましたミッション、まさにその通りです。すなわち私学には建学の理念がある。公立も学校の校訓がありますが、日常の全てのことにおいて徹底したかという点必ずしもそうではなかった。私の勤める学校は創立30年。創立者の山田石神父がつくれたときの思いが一日の教育の中に生きています。これを抜いて私学は考えられないので、今まで海外なんてと、最近、非常に感じるようになってきました。

馬場 私は公立で38年おりました。その経験と私学の二つを対比してみますと、子どもたちの教育をどうするかという点では全く同じ目的です。しかし、信頼ある学校にしていく、教職員と一体となってやっていく、そういう意識は公立で持っている感じが少し違っています。はるかに責任感があり、未来ある子どもたちを育てていくために、



木内氏 左から山本氏、馬場氏、鈴木氏



6月2日に開かれたパネル・ディスカッション

うかがえばお話しします。

鈴木 英語はコミュニケーションツールです。から、英語力を高めて大学入試という点ではなくて会話ができる形にしたい。今年からJETプロプログラムでアメリカ人の女性が増えてきます。私は生徒、教員には英語で会話をするよう指示しています。英語の学力が高い子ども、低い子もいろいろいますが、自然に話をしていきます。コミュニケーションをとっていい。それを続けていくことが大事なことだと思います。

教育改革への意識高める必要 保護者の願いに応えること重要

木内 山本社長は、お子さんが私立に通われていますが、教育の何が気になるか、私立を選んで入れたらいいですか。山本 私の息子は、小学校は地元公立に行かせ、中学校のときに立命館中学校のお世話になりました。私立では本当に子どもたちをどう伸ばしたいのかということを考えています。その当時の校長先生が「私はこの学校で、この子がやりたいことを育てたい」ということを感じていました。木内 例えは中学受験や学校説明会で、どうやって話をしたら、この学校はいい学校だと思われませんか。山本 本当にどう伸びることができるのかという視点ですね。立命館は本当に細かくいろいろ言っていたらいい。これほどきっちりいろんなことで配ります。校長の授業というのには学力の詰め込みだけではなく、本校の建

夢ばかりでなく現実を見る 自信持たせることも大切

木内 山本社長、今の若者はこういうところが足りない、学校教育でやっても足りないというところがある。夢を持っていくのは大事ですが、ビジョンばかりで終わってしまっていて、それが現実とつながっていない。近江八幡には八幡商業高校がありまして、たねやが提案した授業を毎年していたらいいと思います。自分たちが実際に八幡の商店から任入れて、それを売って歩いています。近江商人はもともといろんな地域にいろんなものを持っていて、その地域を華やかにして帰ってくることをしていました。

木内 グローバル教育の中で、失敗してもチャレンジし続けるというのは大事な感覚だと思います。チャレンジする一環として留学も、国や自治体で奨励しています。鈴木先生は留学についてお考えがございませうか。

鈴木 チャレンジする子が少なくなったのは確かです。日本がとて豊かです。無理してチャレンジしなくてもいいのではないかと感じます。以前の厳しい時代だと安全なところがなかったからチャレンジさせるを得なかった。そこはいろんな教育活動で工夫をしなければいけないと思っています。

木内 留学以外でグローバルなチャレンジができる教育はありますか。

鈴木 海外に行くだけがグローバルではありません。自分たちの立場とは違う人々と接すること、いろんな方々と接することがとても大切です。

木内 山本社長から、今の若い人は、夢を持つけど、実際の現実に向いていないという話がありました。馬場先生はどうお考えですか。

馬場 アメリカと日本、韓国、イギリス、ドイツの青少年のアンケートを見ると日本の若者が一番、自分に誇りを持っていないという結果です。非常に残念ですが、それはどうしてか。小中高と育っている中で、自分の力

木内 山本社長、今の若者はこういうところが足りない、学校教育でやっても足りないというところがある。夢を持っていくのは大事ですが、ビジョンばかりで終わってしまっていて、それが現実とつながっていない。近江八幡には八幡商業高校がありまして、たねやが提案した授業を毎年していたらいいと思います。自分たちが実際に八幡の商店から任入れて、それを売って歩いています。近江商人はもともといろんな地域にいろんなものを持っていて、その地域を華やかにして帰ってくることをしていました。

リーダーは憧れの存在に 譲れない一線もきちんと発信

木内 山本社長、人間的に憧れています。「将棋をやったらむちゃくちゃ強かった」と言っていて帰ってきた。先生から、「将棋でこてんはんにはやつめました」と聞かされた。木内 山本社長が憧れられていて、人材教育の中でいいと思っ

全国私学経営 研修会始まる

大 津

全国の私立中学高校による私学経営研修会（日本私学教育研究所主催）が二日から二日間の日程で、大津市のびわ湖大津プリンスホテルで始まった。



私学の現状や将来について意見交換された全国私学経営研修会。大津市のびわ湖大津プリンスホテルで

目。県内では初めての開催で、全国三十二都道府県の私立中学、高校の理事長、校長ら約二百五十人が出席した。今年のテーマは「制度改革と私学のミッション」。学習指導要領改訂や大学入試改革など、国が二〇二〇年を照準に合わせて進める教育制度改革について

て、私学としてどう対応していくか考える。初日は、県私立中学高等学校連合会前会

長で近江兄弟社高校（近江八幡市）の藤沢俊樹校長が、県内私学の現状と課題を報告した。

藤沢校長は、公立高校の入試が全県一区の募集になったことで、県南部の学校を志願する生徒が集中。京阪神の学校にも流出し、生徒の確保に悩む県内私学の現状を説明した。

その上で、人口減少に悩む市町の間で注目を集める「コンパクトシティー」について紹

介。市街地に医療や商業施設など都市機能を集約させるもので「地方で私学が頑張って活躍すれば、地方をコンパクトシティーとして残していける。私学同士が切磋琢磨し、連携していくことで、再生に貢献できるのではな

い」と述べた。三日は、私学の課題についてグループ討論するほか、綾羽高校（草津市）と比叡山高校（大津市）への視察が予定されている。

（浅井弘美）

近江商人の心に私学経営を学ぶ

6月2日、3日の両日、滋賀県大津市で私学経営研修会が開かれました。今年度は「制度改革と私学のミッション」をメインテーマに、新しい教育を実現する人財育成と私学経営についての講演や討議が行われ、全国から集まった123名の先生方が熱心に研修に取り組みました。滋賀県私立中学高等学校連合会をはじめ関係の皆様方のご協力により実り多い研修会になりましたこと、衷心よりの感謝を申し上げます。

さて、毎年恒例の基調講演は地元の企業関係者の中で特に教育に深い理解をお持ちの方をお願いしております。今年度は和洋菓子の老舗、『たねや』グループの山本昌仁社長にご講演いただきました。

山本社長は講演の中で伝統ある菓子作りの難しさを語りました。

昔から販売されている菓子はそのままの製法を守るだけではダメ、時代と共に人々の味覚も微妙に変化する、その空気を読み、少しずつ変化させる、しかしその変化をお客様に気づかれてはならない、お客様に「おいしい」「昔ながらの味」と言わしめるのがプロフェッショナル。

また、近江商人の基本は何かという質問に、「商い」を樹に例えると、どんなに時代が変わっても幹の部分は変えずに守り続けなければならない、幹は創業当時の理念、それに対し枝葉はその時代の特色を最大限に表現するもの、どんな色をつけても良い、と語りました。

私はこの話を聞きながら、私学の経営と創立者の理想である建学精神の関係に似ていると思いました。

建学精神はどのように時代が変化しても変えてはならないもの、しかし、それをより深く生徒に理解させるためにはセピア色の写真や黄ばんだ額を並べているだけではダメ、創立者の想いを生徒や教員が日常語として使える平易なことばに置き換え皆が共有出来る状況にすべき、創立者の理念は大切に守り、教育の方法はその時代の最新手法を導入すべき、などなど。

山本社長のお話は、私学の経営者にとってその役割を再認識させられる力強い応援歌のように私は感じました。

琵琶湖を望む大津、日本の重要な歴史がバウムクーヘンのように積み重なった地で私学の行く末を考える、さわやかな風と共に日常の心の澱が洗われるような気分で大津に向かいました。

(一般財団法人日本私学教育研究所 所長 中川 武夫)